

Title	夫婦間の意識の差からみた双方が満足する男性の育児参加
Sub Title	
Author	鷺見, 祐介(Washimi, Yusuke) 秋山, 美紀(Akiyama, Miki)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2014-02
Jtitle	研究会優秀論文
JaLC DOI	
Abstract	近年, 男性の育児参加が社会的に推進されている。しかし, 男性の家事育児時間は欧米に比べるとまだまだ少なく, 育児休業取得に至っては, 2011年の2.63%が最大であり, 十分に育児参加できているとは言い難い。そこで, 本研究は, 小学校就学前の子どものいる家庭生活における夫婦双方が満足する家事育児参加を促すには, どのような要素が必要であるかを探ることを目的とする。文献調査から, 男性が考える育児と女性が男性に求める育児について違いがあることが示唆され, アンケート調査より, 男女の役割意識に違いがあることが示され, 役割意識を一致させるためには, 「家事育児に関する会話時間」が必要であることがわかった。また, インタビュー調査より, 「価値観の一致」「主体性を持って取り組む」ことが重要であり, それらを促すために, 「会話」「子どもとの触れ合い」「女性のサポート」が必要であることが示唆された。以上の結果から, 男性がよりよい育児にするために「価値観の共有」「会話時間と質の確保」「主体性の喚起」「目的意識の芽生え」「子どもとの触れ合い」の5項目を必要な因子として示し, より多くを満たすことが必要であると本研究では結論付ける。
Notes	秋山美紀研究会2013年度秋学期
Genre	Technical Report
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO90003002-2013-004-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO90003002-2013-004-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究会優秀論文

夫

婦間の意識の差からみた  
双方が満足する男性の育児参加

2013年度 秋学期

AUTUMN

鷺見 祐介 総合政策学部 4年

秋山 美紀 研究会

慶應義塾大学湘南藤沢学会

## 推薦のことば

鷺見祐介君は、夫婦がともに満足できるような男性の育児参加のあり方についての研究に取り組んだ。本研究は、文献調査、アンケート調査、インタビュー調査という三段階の調査から構成される。まず文献調査から示唆された男女の役割意識の違いについて、鷺見君は40組以上の夫婦ペアに対してそれぞれアンケート調査を行い、互いが相手に期待する育児内容のギャップや不満を具体的に把握した。さらに5名の男性へのインタビュー調査により、夫婦の会話時間や女性への思いやり、子どもとのふれあいの時間を通じて、男性自身が主体性や目的意識を涵養することが、双方が満足する育児参加と協働に重要であるという示唆を得た。このように本研究は、「少子化」という社会課題の解決策のひとつである男性の育児参加について、定量的、定性的調査の組み合わせによって興味深い結論を導き出した論文であり、ここに優秀卒業研究として推薦する次第である。

慶應義塾大学

環境情報学部准教授

秋山美紀

慶應義塾大学総合政策学部 卒業論文

夫婦間の意識の差からみた  
双方が満足する男性の育児参加

---

慶應義塾大学総合政策学部 4年

鷲見祐介

2014/01/20

## —Abstract—

近年、男性の育児参加が社会的に推進されている。しかし、男性の家事育児時間は欧米に比べるとまだまだ少なく、育児休業取得に至っては、2011年の2.63%が最大であり、十分に育児参加できているとは言い難い。そこで、本研究は、小学校就学前の子どもがいる家庭生活における夫婦双方が満足する家事育児参加を促すには、どのような要素が必要であるかを探ることを目的とする。文献調査から、男性が考える育児と女性が男性に求める育児について違いがあることが示唆され、アンケート調査より、男女の役割意識に違いがあることが示され、役割意識を一致させるためには、「家事育児に関する会話時間」が必要であることがわかった。また、インタビュー調査より、「価値観の一致」「主体性を持って取り組む」ことが重要であり、それらを促すために、「会話」「子どもとの触れ合い」「女性のサポート」が必要であることが示唆された。以上の結果から、男性がよりよい育児にするために「価値観の共有」「会話時間と質の確保」「主体性の喚起」「目的意識の芽生え」「子どもとの触れ合い」の5項目を必要な因子として示し、より多くを満たすことが必要であると本研究では結論付ける。

## —Keywords—

男性の育児参加／満足度／役割認識／会話

## 目次

第1章	研究背景と目的	6
1.1	研究背景	6
1.1.1	父親の育児参加が求められる背景	6
1.1.2	男性の育児休業取得の現状	6
1.1.3	父親の育児の参加状況と役割分担への満足度	7
1.2	研究目的	8
1.3	本論文の構成	8
第2章	先行研究調査	10
2.1	男性の育児参加の規定要因	10
2.2	性別役割分業意識	11
2.3	男性の考える育児と女性の考える育児	12
第3章	育児に関わる夫婦の育児認識に関する意識調査	14
3.1	調査目的	14
3.2	調査方法	14
3.2.1	対象者	14
3.2.2	調査方法	15
3.3	結果	16
3.3.1	男女の家事育児に関する認識の差	17
3.3.2	満足度との関連	21
3.3.3	夫婦間での家事育児認識の重複度と会話時間との関連	24
3.3.4	自由記述の分析	24
3.4	考察	27
3.4.1	男性の家事・育児への意識	27
3.4.2	男性の考える育児と女性の男性に求めている育児には違いがある	27
3.4.3	男性が感じる二つの負い目	29
	—「育児の意識と実行」と「育児期の子どもを持つ男性における問題点」—	29
3.4.4	夫婦の会話の量と質の必要性	29
第4章	インタビュー調査	32
4.1	調査目的	32
4.2	調査方法	32
4.2.1	対象者	32
4.2.2	分析方法	33
4.3	分析結果	33
4.3.1	価値観の一致・ビジョンのすり合わせ	33

4.3.2 育児行動に主体性を持って取り組む.....	35
4.3.3 育児休業に関する認識と取得.....	38
4.3.4 育児準備や両親学級の意味.....	40
4.4 4章のまとめ.....	41
第5章 総括・展望.....	43
5.1 本研究全体のまとめ.....	43
5.2 本研究の限界と今後の展望.....	44
おわりに.....	45
謝辞.....	46
引用・参考文献.....	47
付録.....	50

## <表目次>

表 1: 対象者(n=89)の属性.....	16
表 2: 家事育児の役割意識から見る男女の差.....	20
表 3: 性別から見る家事育児への認識の違い.....	21
表 4: 満足度との関連.....	23
表 5: 役割意識重複度との関連.....	24
表 6: 男性の任せてほしい役割の理由.....	25
表 7: 女性の配偶者にやってもらいたい役割の理由.....	25
表 8: 男性の自由記述.....	26
表 9: 女性の自由記述.....	26
表 10: 対象者の属性.....	32
表 11: 価値観を一致させる・ビジョンをすり合わせるための行動.....	34
表 12: 会話機会の創出への積極性.....	35
表 13: 男性が育児を主体的に取り組むための要因.....	37
表 14: 育児休業取得を促した要因.....	40
表 15: 育児準備に関する発言.....	40

## <図目次>

図 1: 父親の育児の参加状況.....	7
図 2: 現在の家事・育児の分担の満足度.....	8
図 3: 男性の育児参加を促すために必要なこと.....	11
図 4: 6歳未満児のいる夫の家事・育児関連時間(1日当たり).....	12
図 5: 育児を夫婦共同で行うべきか.....	17
図 6: 現状の家事育児役割分担への満足度.....	17
図 7: パートナーが思う男性の家事育児役割分担への満足度.....	18
図 8: 夫婦間の1日の会話時間.....	19
図 9: 夫婦間の子どもや育児に関する1日の会話時間.....	19
図 10: 家事育児意識の重複度.....	22



## 第1章 研究背景と目的

### 1.1 研究背景

#### 1.1.1 父親の育児参加が求められる背景

近年、男性の育児参加が社会的に推進されている。厚生労働省が「育児をしない男を、父と呼ばない」というキャッチコピーを用いた広報啓発を行ったり、「イクメン」といった言葉が2010年のユーキャン新語・流行語のトップテンに選ばれる等、男性の育児参加に注目は集まっている。また、「イクメンプロジェクト」という、働く男性が、育児をより積極的にすることや、育児休業を取得することができるよう、社会の気運を高めることを目的としたプロジェクトが2010年から始動している。この背景には、女性の社会進出に伴う出生率の低下を食い止めたいという国としてのニーズがある。

厚生労働省の「人口動態統計」によると、平成22年の日本の合計特殊出生率は1.39%である。日本だけでみると、昭和60年以降出生率はどんどん下がり続け、平成17年に1.26%と最も下がってからは、年々微増傾向にある<sup>(1)</sup>。しかし、世界的に見た場合、フランスは2.01%、スウェーデンは1.98%と、主な欧米の国に比べるとまだまだ低いという現状がある<sup>(2)</sup>。

出生率が低い要因の一つとして考えられるのは、性別の役割分業の社会意識を背景として、出産、子育てをすることが女性に負担になりやすいことが考えられる<sup>(3)</sup>。従来我が国においては「男は仕事・女は家庭」といった性別役割意識が広く支持され、実施されていた。1990年代半ばより共働き世帯数が専業主婦（夫）世帯を上回り、近年更に増加傾向にあり<sup>(4)</sup>、1980年代と比較して20代後半から30代前半の女性の労働力率が伸び社会進出が進むにつれ、出産後も女性は仕事を続ける方がいいという意識が高まった<sup>(5)</sup>。しかし、1980年代と比較すると、労働力率は伸びているものの、女性の年齢階級別労働力率では、日本の女性は先ほど挙げた欧米の女性と異なり、出産子育て期に当たる30歳代前半で労働力率が下がるM字型曲線を描く<sup>(6)</sup>。これは、出産をきっかけに約6割の女性が退職をしているという背景をもっている<sup>(7)</sup>。そこで、従来の性別役割分業では育児が立ち行かなくなっており、国を挙げて男性の育児参加を促進する動きが見られている<sup>(8)</sup>。

#### 1.1.2 男性の育児休業取得の現状

厚生労働省の「平成23年度雇用均等基本調査」によると、育児休業の取得は、女性の取得率が年々増加し、1996年（平成8年）では49.1%であったのが、2011年（平成23年）では、87.8%となっている。一方、男性の育児休業取得は1996年（平成8年）の0.12%から増加しているものの、2011年（平成23年）の2.63%が最大である<sup>(9)</sup>。こういう状況を

踏まえ、「今後の仕事と家庭の両立支援に関する研究会報告書～子育てしながら働くことが普通にできる社会の実現に向けて～」(厚生労働省 2008 年)が、海外の先進諸国の政策を参照しながら、父親の子育て参加の実現にむけて、出産後 8 週間の父親の育児休業の取得促進(パパ休暇)、父母ともに育児休業を取得した場合における育児休業期間の延長(パパ・ママ育休プラス)などの男性の育児休業取得を進める提案をしている。他にも、子育て時間の確保ができるような柔軟な働き方の実現、長時間労働の抑制などの提案を行っている<sup>(10)</sup>。

### 1.1.3 父親の育児の参加状況と役割分担への満足度

一般社団法人、中央調査社の調査では、2012 年 6 月 8 日から 11 日にかけて、無作為に選んだ全国 20 歳以上の男女個人 2,000 人を対象に、「父親の育児参加に関する世論調査」を実施した<sup>(11)</sup>。この調査は、調査員による面接聴取法により実施し、1,289 人(回収率 64.5%)から回答を得た。前回の調査は、2011 年 6 月に、前々回の調査は、2010 年 6 月に実施している。

子供がいる人に父親(対象者が男性の場合は本人、女性の場合は配偶者)は育児をしているか(していたか)聞いたところ、「育児に参加していた(参加している)」は 84.3%(昨年:85.1%、一昨年:81.7%)と 8 割を超え、過去 2 回の調査でも 8 割を超えている。これに対し、「育児に参加していなかった(参加していない)」は 15.2%(昨年:13.8%、一昨年:18.2%)となった。(図 1)

父親の育児への参加状況は 85%前後でほぼ変化はなく、8 割の男性が育児に参加していると答えた。

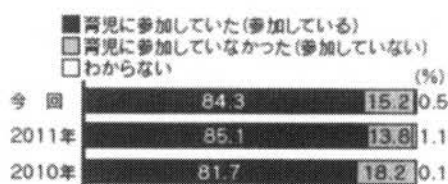


図 1: 父親の育児の参加状況

出展: 中央調査社、2012 年「父親の育児参加に関する世論調査」

一方で、内閣府共生社会政策統括官少子化対策が、満 20~49 歳のインターネット登録モニター 10,054 人に行ったインターネット調査によると、現在の家事・育児の分担に満足している男性は 80.4%にのぼっているにも関わらず、女性 61.6%にとどまっている。男性と女性の間の満足度の差が 2 割にも及ぶという結果になった<sup>(12)</sup>。

Q28 あなたは、現在の家事・育児の分担に満足していますか。(ひとつだけ)

【男女別】	N					(%)	
		満足している	どちらかとい えば満足	どちらかとい えば不満	不満である	満足(計)	不満(計)
全 体	(6,356)	19.6	51.3	23.3	5.9	70.9	29.1
男 性	(3,129)	20.6	59.8	17.0	2.5	80.4	19.6
女 性	(3,227)	18.5	43.1	29.3	9.1	61.6	38.4

図 2：現在の家事・育児の分担の満足度

出典：共生社会政策統括官少子化対策：平成 21 年度インターネット等による少子化施策の点検・評価のための利用者意向調査より

つまり、父親の育児参加は全般的に増加傾向にあり、育児に参加している男性は 8 割を超えているが、母親の満足度は必ずしも高くはなく、不満を持っている人も少なくはないということである。

## 1.2 研究目的

前述の研究背景を踏まえ、導き出した本研究の目的は小学校就学前の子どものいる家庭生活における夫婦双方が満足する男性の家事育児参加を促すには、どのような要素が必要であるかを探ることを目的とする。文献調査、アンケート調査にて、男性の育児参加の規定因、女性が求める男性の育児と家事・育児における現状の役割分担意識とそれに対する満足度、不満が生まれる問題について把握し、父親の育児に対する母親の望む育児行動が、父親の考える育児行動とどの程度一致しているのかなどを夫婦間の意識の差より分析する。これは、今まで夫婦ペアを対象とする研究が少なかったからである。

また、実際に小学校就学前の子供の育児をしている男性へのインタビュー調査を行うことによって、質的な面からも夫婦双方が満足する男性の育児参加を促すために必要な要素について考察する。

そして、得られた答えが、これから子育てを考えているご夫婦や、未だ育児についてイメージのわからない学生にとって有用なものにすることを目標とする。

### 1.3 本論文の構成

本論文の構成と各章の概要を以下に記す。

第1章においては、研究目的に対して男性の育児参加の現状といった社会的背景から説明する。第2章では、男性の育児参加の規定因、性別役割分業の意識、男性が考える育児、女性が求める男性の育児について、先行研究からまとめた。第3章では、実際育児をしている夫婦を対象に行ったアンケート調査の目的と方法、調査内容、分析方法をまとめ、アンケート調査で得られた結果について述べる。アンケート項目より、男女との意識の違いがどういふ面で表れているのか、家事育児の役割満足度と関連があるものはなにかを量的に分析し、アンケート自由記述を元に、男女の意識の差を質的に分析し、考察する。

第4章では、アンケート調査結果をもとに、実際に育児をする男性にインタビュー調査を行った。配偶者の不満をどう察知したのか、家事育児を自分事として捉えるためには何が必要であったのかを知ることを目的とし、よりよい育児参加に必要な要素について考察した。

第5章では、第2章、第3章、第4章で示した考察のまとめを行い、夫婦双方の満足はいく男性育児参加を促すには何が必要であるかについて述べる。また、研究の限界と今後の展望も合わせて述べる。

## 第 2 章 先行研究調査

第 2 章では、男性の育児参加の規定因、性別役割分業の意識、男性が考える育児と女性が男性に求める育児について先行研究からまとめた。

### 2.1 男性の育児参加の規定要因

三浦（2011）<sup>(8)</sup> は促進要因では、環境の面では、職場が子どものために休みをとることができ、休日数が多いという労働条件であること、配偶者の年収が高い事があげられ、意識の面では、子どもに対して制約や負担を感じつつも、子どもが自分になついてくれるという意識を男性が持っていることや、伝統的な男性像に縛られず、家事等を手伝うという家庭内での男女平等の意識があることを示唆している。阻害要因として、環境の面では、仕事が忙しく労働時間が長くなってしまいうような厳しい労働条件の中で就業していることをあげている。意識の面として、仕事を優先的に考える、あるいは仕事をすることは社会的な義務であるという男性自身の意識、具体的な子育てモデルがないことが挙げられていた。

山西（2011）<sup>(9)</sup> は、両親の就労形態別に父親が子育てに参加する規定要因について分析を行った結果、父親たち自身は性別役割分業意識が低いほど、子育て参加に熱心であることが判明し、両親の就労形態に関わらず共通して効果を持つのは、父親自身の意識であることがわかった。と述べている。

また、中央調査社の「父親の育児参加に関する世論調査」（2012）<sup>(11)</sup> では、男性の育児参加を促すために必要なことについて聞いたところ「父親自身が自分も育児をするという気持ちを持つ」という意識の面について回答した人の割合が最も多く 56.4%（昨年：52.9%、一昨年：47.5%）となった。次いで多かったのが、「労働時間の短縮など職場の環境を改善する」であり、52.3%（昨年：47.1%、一昨年：45.0%）で昨年と比較すると 5.2 ポイント増加した。以下、「父親の育児参加を後押しするような行政支援を充実させる」が 40.7%、「育児は女性の仕事という、育児に対する意識を改める」が 32.7%となった。

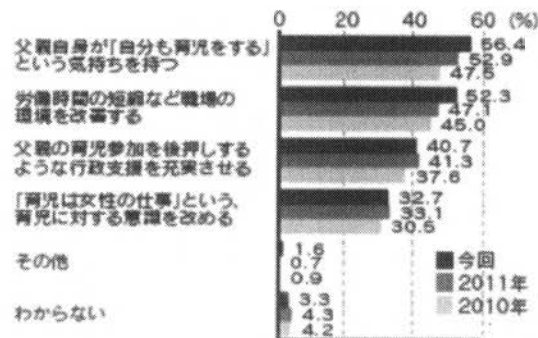


図 3：男性の育児参加を促すために必要なこと

出展：中央調査社、2012年「父親の育児参加に関する世論調査」

これらから、労働条件の緩和も重要な問題であるが、共通して言える事は、男性自身の意識変革というものが、男性の育児参加を促進する要因であるということを示している。

## 2.2 性別役割分業意識

性別役割分業とは、性別により、役割や労働に相違があることで、近代家族においては、夫婦間で一般に「男性は仕事、女性は家庭」という役割や労働の分業がある。

総務省統計局の2011年の社会生活基本調査<sup>(13)</sup>によると、6歳未満の子どもをもつ母親の週全体平均1日の家事関連時間(家事・介護看護・育児・買い物)は7時間41分であるのに対して、父親は1時間7分である。育児時間をみると、母親は3時間22分であるのに対し、父親は39分である。国際的にみても、日本の父親が育児に費やす時間は短い。欧米6カ国(米国、英国、フランス、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー)の男性の週全体平均1日あたりの家事関連時間の平均は2時間56分で、その内育児時間は1時間2分である。(図3)<sup>(14)</sup> また、男性の労働時間を見ると、40歳~44歳が7時間49分と最も長く、次いで35歳~39歳と続き、子育て世代に当たる30代、40代のフルタイム勤務である男性の長時間労働が目立つ<sup>(13)</sup>。「平成24年度男女共同参画社会に関する世論調査」では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について、賛成を小計すると、男性は55.1%にのぼる<sup>(15)</sup>。日本の父親の育児や家事に費やす時間は欧米に比べて非常に短いことから、「夫は外で働き、子育てなどは妻に任せる」という性別役割分業意識がいまだに残っていることが示唆できる。

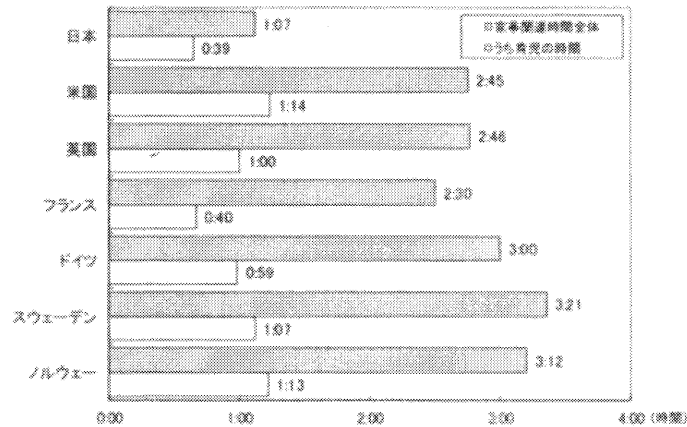


図 4：6歳未満児のいる夫の家事・育児関連時間（1日当たり）

出展：内閣府、2013年「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）レポート2013」

### 2.3 男性の考える育児と女性の考える育児

実際の育児行為についてみると、末子が就学前の子供を持つ男性は、炊事・洗濯・掃除などの家事よりも育児の方を多く行っている<sup>(16)</sup>。

五十嵐ら（2001）<sup>(17)</sup>の1歳～2歳児を持つ父親、母親を対象とした調査によると、父親も育児に直接的に参加すべきと考えているのは、父親約60%、母親では約80%と20%の差があり、母親はより直接的な育児参加を望んでいる傾向があった。父親、母親の考える育児期間中の父親の役割は「妻のよき理解者となる」「妻の話し相手になる」という項目が高い数値を示しており、共に精神的な支持を重要視していることが分かる。そして、「仕事で収入を得る」の項目は60%以上の父親が役割であると認識しており、仕事による家庭貢献という意識が表れているものと考えられる。一方、「家事」と言う項目は父親、母親ともに低い回答率にとどまっており、母親は家事を肯定している表れではないかと思われる。

また、生後6カ月の時期における調査において、父子相互作用によって父性を確立し、わが子への没入感情をもって子どもに接している父親の姿を母親は認識していた。子どもと過ごす空間に幸せを感じている父親の姿を肯定的に捉えている母親の存在も明らかとなり、母親自身も前向きな感情を抱きながら育児に関わっている事が推察された<sup>(18)</sup>。

## 2.4 小括

男性の育児参加を促すためには、「男女平等に育児に参加する」「自分も育児をする」といった男性の意識が重要であると考えられ、性別役割意識が低いほど子育て参加に熱心であることがわかった。しかし、出生率の上がらない原因として、出産子育てが女性の負担になる事が挙げられる。男性の家事育児参加時間が少なく、「仕事で収入を得る」ことを 60% 以上の男性が役割と認識しているなど、徐々にその意識は薄れているものの、「男性は外で仕事、女性は家で家事育児」といった性別役割分業の意識がまだ男性の中にあるということが考えられる。

一方女性は、男性に情緒的サポートや、父性を確立し、子どもと接することを望んでいる。また、父親の育児参加について、母親は、より直接的な育児参加を望んでいる傾向があった。

以上のことより、男性と女性の育児に関する意識の差があることが推察された。この家事育児認識の差が、背景にあるような満足度の差を生んでいる原因であると考え、次の第 3 章では、「男性の考える育児と女性の男性に求めている育児に違いがあり、その違いが満足度に関係しているのではないか」という仮説を検証するためにアンケート調査を行う。



## 第3章 育児に関わる夫婦の育児認識に関する意識調査

### 3.1 調査目的

男性の育児参加は8割にも達しており、参加にも意欲的になってきているにも関わらず、女性の男性に対する育児満足度が低い。

その仮説として「男性の考える育児と女性の男性に求めている育児に違いがある」ということを考えた。そこで、質問票の内容は、男女間には、家事育児に関する認識の違いが存在するののか。夫婦間の家事育児の満足度に差が出るのは、男性の考える育児と、女性の男性に求めている育児に違いがあるためではないか。その他の要因から満足度や男女の役割意識に関連するものはあるか。という三点を明らかにすることを意識し、独自に作成した。質問項目は以下の通りで、質問紙は巻末に掲載する。

1. 育児を夫婦共同で行うべきだと思うか
- 2-1. 現状の育児役割分担に満足しているか
- 2-2. 男性が行う育児役割分担について、パートナーにどう思われていると思うか、実際にパートナーはどう思っているか。
- 3-1. パートナーと育児などの役割分担の話し合いをしているかどうか
- 3-2. 今後、育児の役割分担についての話し合いを定期的にしたと思うかどうか
- 3-3. 夫婦間の1日の会話時間
- 3-4. 夫婦間の子どもや育児に関する1日の会話時間
4. 子育て学級や、両親教室などへの参加の有無
- 5-1. 男性が任せてほしいと思っている家事育児
- 5-2. 女性が配偶者にやってもらいたい家事育児
- 5-3. 男性が任せてほしい家事育児を選んだ理由
- 5-4. 女性が任せたい家事育児を選んだ理由
6. 男性が育児休業をしたいか、女性は配偶者に育児休業をしてほしいか

### 3.2 調査方法

#### 3.2.1 対象者

今回の調査では、小学校就学前の子どもを持つ夫婦で、調査趣旨を説明し、同意を得られた70組140名を調査対象とした。小学校就学前の子どもがいる夫婦に限定した理由は、小学校という義務教育が始まる前であり、より育児が夫婦の中で積極的に関わるべき問題として取り上げられるためである。対象者の選定は、子育てサポート企業として、「くるみ

んマーク」を取得している企業の人材開発グループを通じて協力を得られた夫婦と、同研究会のメンバーの内定先企業を通じて協力を得られた夫婦を対象にアンケート調査を行った。対象者のうち、くるみマーク取得企業は、大手化学メーカーとそのグループ会社である。男性の育児休業制度利用実績もあり、2010年度76名、2011年度89名、2012年度78名が育児休業制度を利用しており、男性社員の2012年度の取得率は37.2%と、全国平均最高の2.63%を大きく上回っている。もう一方は、中小の医療系システム会社の方と、その友人の方にURLを拡散したため、企業サポート等は多種多様であると考えられる。

対象者には、第1次は紙媒体によるアンケート用紙の配布をし、

第2次には、対象者にはwebアンケートのURLをメールし、計89名の回答を得ることができた(回収率63.6%)。そのうち男性44名、女性45名、夫婦のペアが42組であった。

調査期間：第1次2013年10月25日から11月7日の13日間

第2次2013年12月3日から12月12日の9日間を合わせた計22日間である。

### 3.2.2 調査方法

男性用、女性用の自記式質問用紙法を用いて行った。調査票への回答は、極力バイアスを排除するために、いくつか条件を付けた。1つ目は、夫婦間で相談せずに独自で記入することである。2つ目は、記入後は、父親用、母親用それぞれ個別の封筒に調査票を入れて頂き、封印の上で回収するように依頼をした点である。この2点の条件を加える事により、バイアスを取り除き、より精度の高い調査ができると考えた。また、第2次のアンケートは紙媒体でなく、webのアンケートとして実施したが、条件は上記のものと同じく、父親用、母親用のアンケートを用意した。以上の条件をもとに、小学校就学前の子どもを持つ夫婦を対象に調査を実施した。

結果は、男女の二群に分けて、それぞれの家事育児への認識の違いの比較を行った。また、「とても満足」「ほぼ満足」を合併し、「満足」と表し、「ほぼ不満」「かなり不満」を合併し「不満」という二群に分け、満足度との関連をみた。これらは度数と割合を記述し、統計学的手法は $\chi^2$ 検定またはFisherの直接確率法により、男性と女性、満足と不満を比較し、 $p$ 値 $<0.05$ を統計学的有意差ありとし、文中でその値を明記した。解析は、IBM Statistics 21によった。

また、船橋(1999)によると、親の基本的役割は「扶養」、「社会化」、「世話」の3つに集約される<sup>(19)</sup>。したがって今回の調査では、父親の子育て認識項目として、「世話」「社会化」「家事」についてそれぞれ以下のような項目を設けた。

「世話」に関する項目は、「おむつ替え」、「子どもをお風呂に入れる」、「食事補助(離乳食等)」、「着替え」、「寝かしつけ」「授乳(ミルク)」の6項目である。

「社会化」に関する項目は、「子どもの遊び相手」、「しつけ・言い聞かせ」、「知育教育」、「保

育園の送り迎え」、「保育園などの行事」の5項目である。

「家事」に関する項目は、「ゴミだし」、「掃除(屋外)」、「掃除(屋内)」、「料理」、「皿洗い」、「買い物」、「洗濯」の7項目である。

アンケートの際には、このほかに「その他」「一つもない」といった項目を用い、計20項目から、上位3つを夫婦それぞれに選択してもらった。

その上位3位までの結果表を作成した。また、上位3つまでに選ばれたものを上位から3点、2点、1点を点数化し、集計したのも同様に表にまとめたので、同じく示す。(「その他」「一つもない」に関しては、点数には加えていない)

自由記述については、「男性の任せてほしい役割の理由」「女性の配偶者にやってもらいたい役割の理由」「男性の自由記述」「女性の自由記述」について、分類分けを行った。「男性の任せてほしい役割の理由」については、何を意識して家事育児に臨んでいるのかに着目して分類した。「女性の配偶者にやってもらいたい役割の理由」については、男性に求める家事育児についての女性の考えについて分類した。「男性・女性の自由記述」については、主に配偶者への感謝・意見・不安・要望について、分類分けをした。

### 3.3 結果

回答者の属性は以下表1のとおりである。(子どもの人数に関しては、夫婦ペアの42組は、1組を“1”とカウントしているため、ペアが揃わなかった5名と合わせてn=47となっている。)

表 1: 対象者(n=89)の属性

		男性	女性
人数		44	45
年齢	20歳未満	0(0.0%)	0(0.0%)
	20～24歳	0(0.0%)	0(0.0%)
	25～29歳	3(6.8%)	2(4.4%)
	30～34歳	13(29.5%)	22(48.9%)
	35～39歳	22(50.0%)	16(35.6%)
	40歳～	6(13.6%)	5(11.1%)
雇用状況	自営業	1(2.3%)	2(4.4%)
	正社員/正職員	43(97.7%)	23(51.1%)
	嘱託社員/嘱託職員	0(0.0%)	2(4.4%)
	派遣・請負	0(0.0%)	1(2.2%)
	パート・アルバイト	0(0.0%)	3(6.7%)
	主夫・主婦	0(0.0%)	13(28.9%)
	その他	0(0.0%)	1(2.2%)
子どもの人数	0人		1(2.1%)
	1人		28(59.6%)
	2人		16(34.0%)
	3人		2(4.3%)
	4人～		0(0.0%)

### 3.3.1 男女の家事育児に関する認識の差

性別から見る家事育児への認識の違いについて、表 3 にまとめた。

#### (1) 育児を夫婦共同で行うべきだと思うか

育児を夫婦共同で行うべきかどうかについて、「強くそう思う」「ある程度そう思う」の回答が全体の 100% となり、性別役割分業の認識はなく、男女ともに育児は夫婦共同で行うべきだという結果となった。

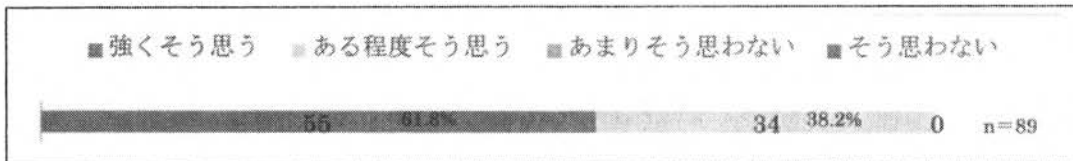


図 5：育児を夫婦共同で行うべきか

#### (2) 現状の家事育児役割分担への満足度

男性は、現状の家事育児役割分担への満足度について、「とても満足」「ほぼ満足」を合わせ、41名(93.2%)が満足しており、3名(6.8%)が不満に思っていた。女性は「とても満足」「ほぼ満足」を合わせ、30名(66.6%)が満足しており、15名(33.4%)が不満に思っていた。男女の差を見ると、男性は家事育児役割分担への満足度が有意に高い結果となった。(p=0.003)

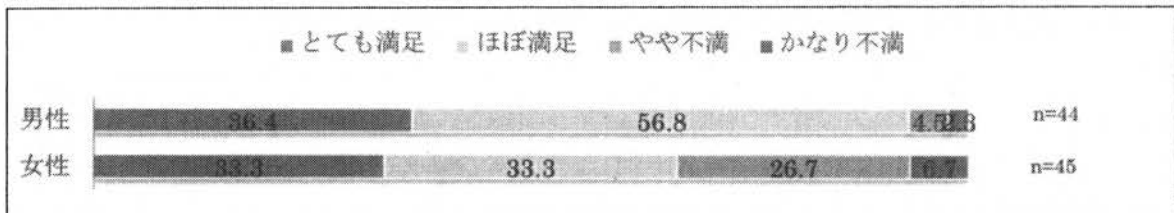


図 6：現状の家事育児役割分担への満足度

#### (3) パートナーが思う男性の育児役割の満足度

「パートナーは自分に満足している」と考える男性は、「とても満足していると思う」「ほぼ満足していると思う」を合わせ 21名(47.7%)で、「パートナーが自分に不満があると思っている」という男性は、「やや不満」「かなり不満」を合わせ、23名(52.3%)であった。「パ

ートナーに満足している」という女性は、「とても満足している」「ほぼ満足している」を合わせ 33 名(73.3%)で「パートナーに不満がある」女性は、「やや不満」「かなり不満」を合わせ、12 名(28.9%)であった。男女の差を見てみると、男性はパートナーに不満を持たれているが、女性は男性に対して、そこまで不満を持っていないということがわかった。(p=0.017)

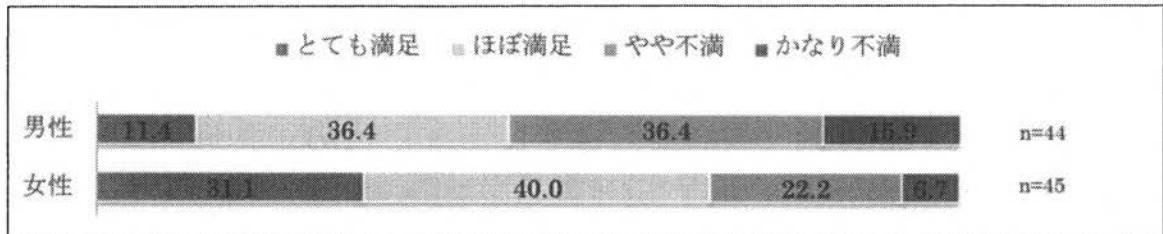


図 7: パートナーが思う男性の家事育児役割分担への満足度

(4) パートナーと育児などの役割分担の話し合いをしているかどうか

育児などの役割分担についての話し合いをしたという男性は 29 名(65.9%)で、女性は 19 名(42.2%)、話し合いをしていないという男性は 15 名(34.1%)で女性は 26 名(57.8%)であった。夫婦共通であるはずにも関わらず、「話し合いをした」という男性が多いという結果として有意な差が見られた。(p=0.034)

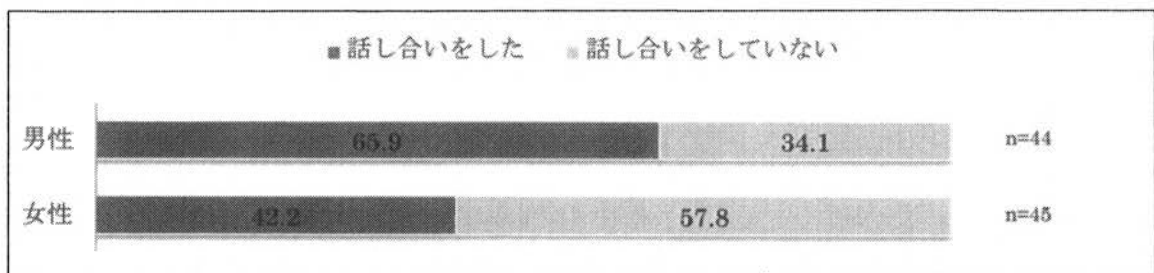


図 8: パートナーとの役割分担の話し合いの有無

(5) 今後、育児の役割分担についての話し合いを定期的に行いたいと思うかどうか

役割分担についての話し合いを定期的に行いたいと「とてもそう思う」「そう思う」という男性は、32 名(72.8%)で、女性は 22 名(48.9%)で、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」男性は、12 名(27.3%)で、女性は 23 名(51.1%)であった。ここから、男性の方が定期的に話し合いたいという結果として有意な差が見られた。(p=0.030)

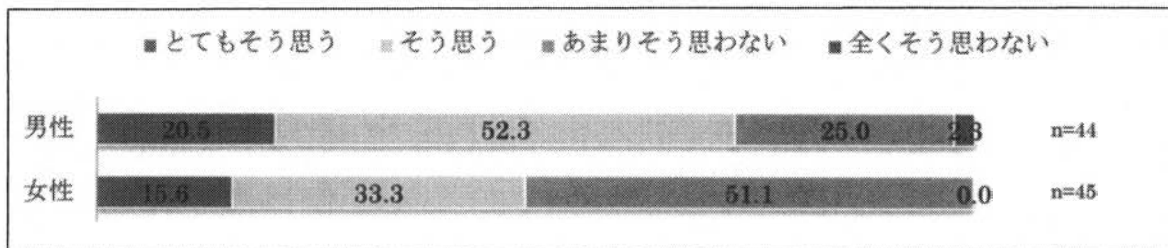


図 9：役割分担の話し合いについて定期的に話し合いたい

(6) 夫婦間の1日の会話時間

夫婦間の会話時間については、「30分未満」と答える男性が11名(25.0%)、女性が18名(40.0%)「30分以上」と答える男性が33名(75.0%)、女性が27名(60.0%)であった。ここに男女の認識の差について、有意な差は認められなかった。(p=0.175)

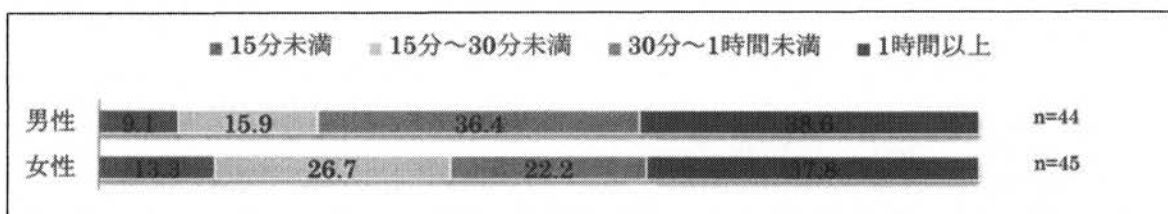


図 10：夫婦間の1日の会話時間

(7) 夫婦間の子どもや育児に関する1日の会話時間

夫婦間の子どもや育児に関する1日の会話時間について、「30分未満」と答える男性が24名(54.5%)、女性が26名(57.8%)「30分以上」と答える男性が20名(45.5%)、女性が19名(42.2%)であった。ここに男女の認識の差について、有意な差は認められなかった。(p=0.832)

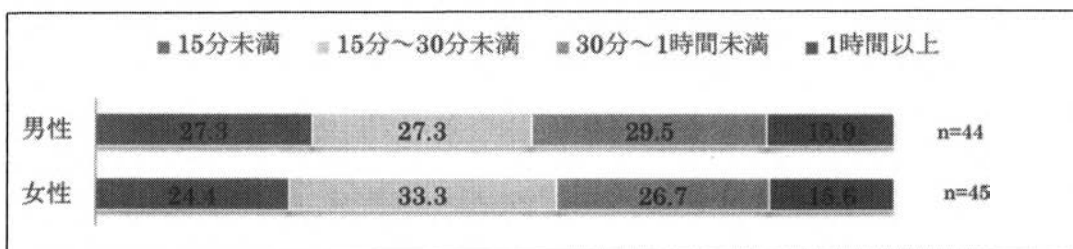


図 11：夫婦間の子どもや育児に関する1日の会話時間

(8) 「自分に任せてほしい」「配偶者にやってもらいたい」家事育児から見る男女の差

役割認識の点数化について表 2 にまとめた。男性は上位から「家事」(48.8%)「社会化」(31.0%)「世話」(20.2%)という順になったのに対し、女性は「社会化」(52.9%)「家事」(26.2%)「世話」(20.9%)となった。したがって、男性の任せてほしい家事育児と、女性の配偶者にやってもらいたい家事育児には、違いがあることがわかった。

		男性 n=44	女性 n=45
1位			
世話	N(%)	8(18.2%)	5(11.1%)
社会化	N(%)	10(22.7%)	31(68.9%)
家事	N(%)	25(56.8%)	8(17.8%)
その他	N(%)	1(2.3%)	1(2.2%)
2位			
世話	N(%)	10(22.7%)	13(28.9%)
社会化	N(%)	16(36.4%)	16(35.6%)
家事	N(%)	17(38.6%)	15(33.3%)
その他	N(%)	1(2.3%)	1(2.2%)
3位			
世話	N(%)	8(18.2%)	14(31.1%)
社会化	N(%)	18(40.9%)	14(31.1%)
家事	N(%)	17(38.6%)	15(33.3%)
その他	N(%)	1(2.3%)	2(4.4%)
点数化			
世話	N(%)	52(20.2%)	55(20.9%)
社会化	N(%)	80(31.0%)	139(52.9%)
家事	N(%)	126(48.8%)	69(26.2%)

表 2：家事育児の役割意識から見る男女の差

(9) 育児休業に関する男女の認識の差

男性で育児休業を取得したいと考える人は 31 名(70.5%)で、配偶者に育児休業を取得してほしい女性は 22 名(48.9%)であった。ここから男性は育児休業取得に前向きであるが、女性はあまり望んでいないということが男女間で有意な差がでた。(p=0.030)

表 3：性別から見る家事育児への認識の違い

			男性	女性	p値
Q7あなたは、現状の育児の分担に満足していますか？	満足	N(%)	41(93.2%)	30(66.7%)	0.003
	不満	N(%)	3(6.8%)	15(33.3%)	
Q8パートナーは現状の育児分担に満足していると思いますか？(男性用質問)	満足していると思う	N(%)	21(47.7%)		0.017
	不満があると思う	N(%)	23(52.3%)		
Q8パートナーが行う現状の育児分担に満足していますか？(女性用質問)	満足している	N(%)		33(73.3%)	0.017
	不満がある	N(%)		12(26.7%)	
Q9あなたは配偶者と育児などの役割分担の話し合いをしましたか？	はい	N(%)	29(65.9%)	19(42.2%)	0.034
	いいえ	N(%)	15(34.1%)	26(57.8%)	
Q10育児の役割分担について話し合いを定期的に行いたいと思いますか？	思う	N(%)	32(72.7%)	22(48.9%)	0.03
	思わない	N(%)	12(27.3%)	23(51.1%)	
Q11夫婦間の会話時間は1日平均どれくらいですか？	30分未満	N(%)	11(25.0%)	18(40.0%)	0.175
	30分以上	N(%)	33(75.0%)	27(60.0%)	
Q12子どもや育児に関する会話は1日平均どれくらいですか？	30分未満	N(%)	24(54.5%)	26(57.8%)	0.832
	30分以上	N(%)	20(44.0%)	19(42.2%)	
Q16あなたは育児休業を取得したいと思いますか？(男性用質問)	はい	N(%)	31(70.5%)		0.03
	いいえ	N(%)	13(17.8%)		
Q16あなたは配偶者に育児休業を取得してほしいですか？(女性用質問)	はい	N(%)		22(48.9%)	0.03
	いいえ	N(%)		23(51.1%)	

### 3.3.2 満足度との関連

満足度に関連する要素について、表 4 にまとめた。

#### (1) 年齢、子どもの人数満足度との関連

年齢を 20 代、30 代、40 代と区切って満足度との関連を調べ、また子どもの人数を第一子のみと、それ以上とに分けて満足度との関連を見たが、これらは、渡邊ら (2001) (20) の報告と同様に、本調査でも関連性を認めなかった。(p=0.490) (p=0.600)

#### (2) 配偶者との育児役割分担の話し合いの有無と満足度の関連

配偶者と育児等の役割分担の話し合いをした人の中で、満足と答える人は 44 名(91.7%)で、話し合いをしていない人の中で、満足と答える人は 27 名(65.9%)であった。したがって、役割分担の話し合いをした方が、満足度が有意に高いという結果が出た。(p=0.003)



### (3) 夫婦間の会話時間、育児についての会話時間と満足度との関連

育児家事の役割分担に満足をしている人(n=71)のうち、夫婦で1日平均30分以上話している人は53名(88.3%)、30分未満の人は18名(62.0%)で、夫婦間の会話時間が多い方が、満足度が有意に高い結果が出た。(p=0.009)また、同様に、夫婦で子どもや育児についての1日平均の会話時間が30分以上の人は35名(89.7%)で30分未満の人は、36名(72.0%)であり、夫婦間の子どもや育児に関する会話時間が長い方が、満足に思う人が有意に多いという結果が出た。(p=0.039)

### (4) 子育て学級の参加の有無、育児休業取得への意識と満足度との関連

子育て学級、両親学級に夫婦揃って参加したことがある人は89人中48名(53.9%)と過半数を超える結果となったが、そこに満足度との関連は見られなかった。(p=0.432)また、育児休業についても育児休業取得に前向きな人は89人中54名(60.7%)と過半数を超える結果となったが、そこに満足度との関連は見られなかった。(p=0.057)

### (5) 家事育児意識の重複度と満足度との関連

夫婦間での「男性の任せてほしい家事育児」と「女性のやってもらいたい家事育児」について、3つ挙げてもらった内、順不同で一致したものに点数を付けた。3つ重複があるものは3点、ひとつも重複がないものは0点である。その結果が以下のものである。重複度の平均点は1.02点で重複度1以下が半数以上を占めているため、男性の任せてほしいものと、女性のやってもらいたいものはまだまだ一致しきれていないと示唆できる。

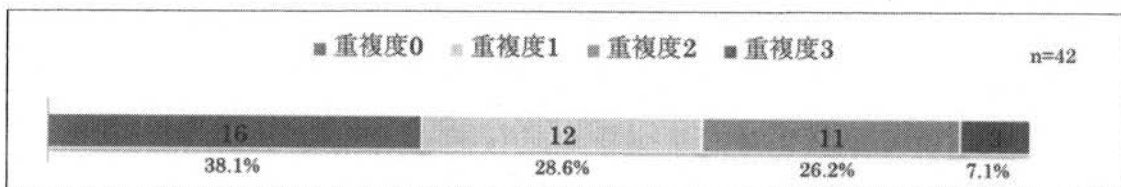


図 12 : 家事育児意識の重複度

また、重複度 0, 1(28 組 56 名(66.7%))を重複度が低い群、重複度 2, 3(14 組 28 名(34.3%))を重複度が高い群として、満足度との関連を見た。その結果、重複度の高い人(n=28)のうち、満足に思う人は 27 名(96.4%)で、重複度の低い人(n=56)のうち、満足に思う人は 42 名(75.0%)であった。つまり、夫婦間での「男性の任せてほしい家育児」と「女性のやってもらいたい家事育児」の重複度が高い方が、満足に思う人の割合事が有意に高いという結果となった。(p=0.016)

表 3：満足度との関連

			満足	不満	p値
Q1あなたの年齢を教えてください。	20代	N(%)	5(100.0%)	0(0.0%)	0.490
	30代	N(%)	57(78.1%)	16(21.9%)	
	40代以上	N(%)	9(81.8%)	2(18.2%)	
Q4子どもの人数は何人ですか？	1人	N(%)	43(81.1%)	10(18.9%)	0.600
	2人以上	N(%)	26(76.5%)	8(23.5%)	
Q9あなたは配偶者と育児などの役割分担の話し合いをしましたか？	はい	N(%)	44(91.7%)	4(9.0%)	0.003
	いいえ	N(%)	27(65.9%)	14(34.1%)	
Q10育児の役割分担についての話し合いを定期的にしたいと思いませんか？	思う	N(%)	45(83.3%)	9(16.7%)	0.418
	思わない	N(%)	26(74.2%)	9(25.7%)	
Q11夫婦間の会話時間は1日平均どれくらいですか？	30分未満	N(%)	18(62.0%)	11(38.0%)	0.009
	30分以上	N(%)	53(88.3%)	7(11.7%)	
Q12子どもや育児に関する会話は1日平均どれくらいですか？	30分未満	N(%)	36(72.0%)	14(28.0%)	0.039
	30分以上	N(%)	35(89.7%)	4(10.2%)	
Q13子育て学級や、両親学級などに夫婦揃って参加したことはありますか？	ある	N(%)	40(83.3%)	8(16.7%)	0.432
	ない	N(%)	31(75.6%)	10(24.4%)	
Q14家事育児意識の重複度	0~1	N(%)	42(75.0%)	14(25.0%)	0.016
	2~3	N(%)	27(96.4%)	1(3.6%)	
Q16あなたは育児休業を取得したいと思いますか？(男性用質問)	はい	N(%)	47(66.2%)	7(38.9%)	0.057
Q16あなたは配偶者に育児休業を取得してほしいですか？(女性用質問)	いいえ	N(%)	24(33.8%)	11(61.1%)	

### 3.3.3 夫婦間での家事育児認識の重複度と会話時間との関連

夫婦間での家事育児認識の重複度に有意にはたらく要因について分析する。役割認識の重複度との関連については、表 5 にまとめた。役割分担についての話し合いをした人(n=43)のうち、重複度の高かった人は 20 名(46.5%)、話し合いをしなかった人(n=41)のうち、重複度の高かった人は 8 名(19.5%)という結果から、夫婦間での家事育児認識の重複度を高めるためには役割分担の話し合いが必要であることがわかった。(p=0.011)

夫婦間の会話時間については、重複度との間に有意な差は見られなかった。(p=0.616)しかし、子どもや育児に関する会話時間について、1 日 30 分以上話す人(n=38)のうち、重複度の高かった人は 17 名(44.7%)、1 日 30 分未満の人(n=46)のうち、重複度が高かった人は 11 名(23.9%)であった。ここから、夫婦間で子どもや育児に関する会話時間を日々 30 分以上もっていると重複度が高くなることがわかった。(p=0.044)

表 5：役割意識重複度との関連

			重複度0, 1	重複度2, 3	p値
Q9あなたは配偶者と育児などの役割分担の話し合いをしましたか？	はい	N	23	20	0.011
		%	53.5%	46.5%	
	いいえ	N	33	8	0.616
		%	80.5%	19.5%	
Q11夫婦間の会話時間は1日平均どれくらいですか？	30分未満	N	18	7	0.616
		%	72.0%	28.0%	
	30分以上	N	38	21	0.044
		%	64.4%	35.6%	
Q12子どもや育児に関する会話は1日平均どれくらいですか？	30分未満	N	35	11	0.044
		%	76.1%	23.9%	
	30分以上	N	21	17	0.044
		%	55.3%	44.7%	

### 3.3.4 自由記述の分析

自由記述については、「男性の任せてほしい役割の理由」「女性の配偶者にやってもらいたい役割の理由」「男性の自由記述」「女性の自由記述」について、カテゴリ分けを行った。以下にそのカテゴリ分けを記す。

「男性の任せてほしい役割の理由」については、何を意識して家事育児に臨んでいるのかに着目して 4 つに分類することができた。主に目立ったのは、自分に任せてほしい家事育児で選ばれたものの多くが「家事」に属するものであったことからわかるように、妻を意識した役割認識であった。妻を意識した記述の中には「自分にできることをやってサポートしていきたい」といったように、自分の能力を考えたものが含まれているものも多かった。

表 6：男性の任せてほしい役割の理由

カテゴリ	代表的記述
妻を意識した役割意識	平日は短時間で済むもの、週末はなるべく妻の負担を減らせるように多くのことをやる。 妻にも少しは休んでほしい。
自分の能力を考えた 役割意識	自分にできるため。 他の項目をやる自信がない。
仕事を第一に考えた 役割意識	仕事をしながらでもできるから。 勤務の状況の制約の中で、最大限貢献でき、配偶者も喜んでくれそうだから。
子どもを意識した 役割意識	子どもと接する時間を多くしたい。 子どもと一緒にいる時間が多くないのでお風呂と遊び相手などで子どもとの会話時間を持ちたい。

「女性の配偶者にやってもらいたい役割の理由」については、配偶者に求める家事育児についての女性の考えについて分類し 6 つのカテゴリに分類できた。主に目立ったのは、配偶者にやってもらいたい家事育児で選ばれたものの多くが「社会化」に属するものであったことからわかるように、「子どもと接してほしい」というものであった。その記述の中には、「子どものためにもパートナーがやってくれた方がいい」というように、子どもの今後の成長のために必要だというものもあれば、「子どもとの関係を父と母同じくらいに強めてほしい」といった、夫に、子どもと触れ合うことによって貴重な育児の時間を共有してもらいたいという記述もあった。

表 7：女性の配偶者にやってもらいたい役割の理由

カテゴリ	代表的記述
子どもと接してほしい	子どもとのコミュニケーションを取ってもらうために、お風呂は一緒に入ってほしい。
育児をやってほしい その間に家事をしたい	子どもと遊んでもらっている間にほかの仕事ができるから。 子どもと遊んでもらったり、お風呂の間に、掃除などの家事を片付けたいから。
家事をやってほしい その間に育児をしたい	今は下の子に私の時間をとられているので、食後のお皿洗いをしてもらっている間に上の子の相手をしたい。
父親としての役割や存在 を自覚してほしい	子どもにとっても父親と触れ合ったり、父親としての責任や役割として、きちんと意識してもらいたいから。
自分の時間を確保したい	お風呂に子どもと入ってもらえれば、後で一人でのんびり入れる。
やれることでいいから やってほしい	パートナーのやり方に口を挟まなくてもよい作業だから。 洗濯機のスイッチを入れて回してくれるだけでもありがたい。

「男性・女性の自由記述」については、主に配偶者への感謝・意見・不安・要望について、分類分けをした。男性の傾向として、妻への感謝と行動改善への意欲が多くみられた。次いで妻への要望が多く、家事育児に関わりきれない自分への不満は多少見られたが、社会への不満はほぼ見られなかった。女性の傾向としては、夫への要望が多くみられた。要望についてはさらに二つに分類でき、一つは、「とってもよくやってくれているし、感謝している。文句もない。でも私も頑張っていることをわかってほしいときもある。」といったような、現状には満足しており、そこにプラスアルファの要素を求めるものであり、二つ目は、「掃除、洗濯、子どもの着替えなど、お願いしなくても自ら手伝ってほしいものです」のような、現状に不満があるため、新たな要求をしているものであった。

表 8：男性の自由記述

カテゴリ	代表的記述
妻への感謝	家事・育児分担について、妻の方が自分よりも明らかに負担が大きいと思うが、よくこなしていただき、本当にありがたいと思っている
家事育児に関わりきれない自分への不満	家事・育児分担について、妻の方が自分よりも明らかに負担が大きいと思う。平日ほとんど何もできないので、少し心苦しいのが現実です。
妻への要望	不満を溜める前に話し合いをしてほしい(男性側が気付かないことが多いため)
行動改善への意欲	無理せず、これからなんでも話し合うようにしよう。

表 9：女性の自由記述

カテゴリ	代表的記述
母親へのストレスケア	とってもよくやってくれているし、感謝している。文句もない。でも私も頑張っていることをわかってほしいときもある。
夫の育児意識への不満	掃除、洗濯、子どもの着替えなど、お願いしなくても自ら手伝ってほしいものです。
夫の仕事観への不満	男の仕事が優先されるべきという考えを捨てて、時間に余裕のある時だけ家事を「手伝う」というスタンスを改善してほしい
父親としての役割への不満	母親と同等に役割を担うことは社会的、能力的にも難しいと思うが、自分が家庭の中での父親としての役割を意識して、自発的に子育てや家事に取り組むべきだと思う。
夫に満足している	同じだけ育児休暇も取得してもらい、子どもへの関与も私よりはるかに多いので不満はありません。
社会への不満	他社においても(日本社会全体)男性が仕事だけでなく、ワークライフバランスを考え、育児に積極的に参加できるような働き方や環境が整備されることを強く望みます。

### 3.4 考察

今回、小学校就学前の子どもをもつ夫婦を対象に、男女間には、家事育児に関する認識の違いが存在するのか。夫婦間の家事育児の満足度に差が出るのは、男性の考える育児と、女性の男性に求めている育児に違いがあるためではないか。その他の要因から満足度や男女の役割意識に関連するものはあるかを明らかにするために調査を行った。それらを解析したところ有意に関係する点が明らかになった。

#### 3.4.1 男性の家事・育児への意識

育児を夫婦共同で行うものという考え方が今回調査したすべての男女の回答であり、母親主体であるものといったような固定的性別役割分担意識をもつ人はいなかった。この結果は、中央調査社の世論調査(2012)<sup>(11)</sup>の結果を上回るものであった。一番の要因として考えられるのは、アンケートにご協力いただいた対象者の影響である。今回ご協力していただいた「くるみんマーク」を取得している企業は、両立支援の取り組みを多くしている。男性の育児休職取得促進と風土啓発に向けた取り組みとして、育児休職促進ポスターの作成・掲示と、出生時にリーフレットの配布を行い、子どもが生まれた男性社員の4割が育児休職を取得している。このような取り組みがあり、男性の育児参加を推進する空気が自然と出来上がっているため、夫婦共同で育児を行うといった回答が多くなったと考えられる。また、今後定期的に話し合いをしていきたい男性や、育児休業を取得したい男性が多いことから、家事育児への意識が定着しつつあることがわかる。

#### 3.4.2 男性の考える育児と女性の男性に求めている育児には違いがある

男性の任せてほしい家事育児で一番多かった「家事」に対し、女性の「社会化」という結果より、仮説として挙げていた男性の考える育児と女性の男性に求めている育児に違いがあるということが実証された。五十嵐ら(2001)の調査によると、男性の育児参加の理由として、「子どもと一緒にいたい」「父親の関わりは育児に大切」といった回答が多くあり、母親の協力を意識したものではなく、子どもへの関心に視点を置いている<sup>(17)</sup>という結果が出ており、今回の結果とは異なった。

男性の意識にこのような変化が見られた原因として、「女性の社会進出の影響」があると推測される。厚生労働省「平成23年度版働く女性の事情」より、平成23年の年齢階級別の労働力率を10年前の平成13年と比較すると、「30~34歳」の有配偶者の場合、9.3ポイントと上昇幅が大きくなっている。また、「25~29歳」の有配偶者の労働力率も9.6ポイントの上昇となっており、お互いに家事育児に割ける時間が限られている<sup>(21)</sup>。その中で、男性は、今まで多少経験があり、普段妻が主に関わっている「家事」を多く選択する傾向に

あったと考える。

役割認識の理由を見ると、男性は「仕事をしながらでも」「勤務状況の制約の中で」という言葉から、普段仕事や時間の制約の中で、女性のサポート役として家事育児に取り組んでいる様子がうかがえる。また、その行動は「自分にできるものを選んだ」という記述からも、自分の能力の中でできることをやろうとしている。その他には「週末はなるべく妻の負担を減らせるように」や「妻にも少しは休んでほしい」と、家事育児を間接的な「妻のための」と捉える言葉が目立つ。一方女性は「子どもとの時間を確保してほしい」や「子どもと多く接してほしい」といった「子どものための」直接的な家事育児といった認識を持っている。また、「男親と過ごす時間はかけがえのないもので、また誰にも代わりができない事だと思う。家事等は誰が主になるということを決めなくてもいい」といった記述があるように、男性にも子どもとの関係を父と母同じくらいに強めてほしい、父親としての責任や役割をしっかりとこなしてほしいという願望が表れている。「間接的家事」「直接的育児」といった面からも、男女の違いがあることがわかる。

女性の満足度について見てみると、父親の育児の役割分担に対する母親の満足度は66.7%と「平成21年度インターネット等による少子化施策の点検・評価のための利用者意向調査」とほぼ同じ割合を示した<sup>(12)</sup>。しかし、自由記述の部分には、満足度は高くなっているにも関わらず、母親の不満ともとれる回答がいくつかあった。例えば、「父親としての役割を意識して、自発的に子育てや家事に取り組むべきだと思う」「夫にはもっと子どもと一緒に出掛けたり遊んだりもしてほしい」「もうちょっとこちらの状況を把握してほしい」といったものである。「自発的に」「もうちょっと」という言葉に表れているように、女性は現状の育児分担にはある程度満足しているが、理想は現状よりも少し高い位置にあり、育児・家事により積極的に取り組んでほしいと思っていると解釈できる。

以上より、役割認識の理由、満足度、自由記述をみると、女性は男性に「直接的に」「主体的に」家事育児に関わってほしいと考えていることがわかる。

また、「とてもよくやってくれているけれど、私が頑張っていることをわかってほしいときもある」「育児ストレスについて、少しでも共有、共感してもらえたらもっと楽になるかもしれない」という、女性は現状の育児分担にはある程度満足しているが、理想としては、育児を共に行うパートナーとして、女性は情緒的サポートを望んでいるという実態が結果から読み取れた。これは、男性の母親への家事行為とは別に、母親へのケアという面からの要望である。平山（2003）は、妻の良好な心理状態を維持するうえで、夫婦が家事・育児に同等・平等にかかわり、夫婦間で相互的・互恵的な情緒ケアが行われることが重要である<sup>(22)</sup>と示している。したがって、男性には、共に家事育児をするパートナーとして情緒的なサポートを、子育てをする父親として子どもとの触れ合いが求められている。この女性が求めていることを男性が認識できずにいることが、家事育児に関する認識のギャップを生み、同様に育児休業取得をしてほしいと思う女性が過半数を超えない原因を生み出している一つの原因であると示唆される。

### 3.4.3 男性を感じる二つの負い目

#### —「育児の意識と実行」と「育児期の子どもを持つ男性における問題点」—

両者の満足度は、男性 93.2%、女性が 66.7%と、双方満足度は高めではあったが、背景で用いたアンケート結果と同様に 2 割近い開きが出た。しかし、男性はパートナーには満足してもらっていないと思う人が 23 名 (52.3%) と半数いるが、その男性に対して、女性は 73.3%と 7 割近くが満足している。この原因として、家事育児に従事している時間が女性の方が長いため、自身の自己評価を「満足」と評価しにくかったことが推測される。その推測を裏付けるものとして、男性の自由記述部分においては、「充分よくやってくれている。逆に平日ほとんど何もできないでいるので、少し心苦しいのが現実です。」であったり、「家事育児分担について、自分よりも明らかに負担が大きいと思うが…」という言葉から、育児家事にもっと関わりたいという意識はあるが、すべてを実際の行動に移せていない実態がみられた。この実態が男性に一種の負い目のようなものを感じさせており、自身の家事育児行為に満足できていない要因となっていると考えた。

そして、パートナーに満足してもらっていないと思う男性 23 名のうち 14 名 (60.7%) が育児期の子どもを持つ男性であった。育児期とは、第一子出生から小学校入学までの期間である。これらの男性は、「子育てをする自分を具体的にイメージできていない」という要因から、自分自身の家事育児に自信が持てていないと推測できる。ベネッセ次世代育成研究所(2007)が行った第 1 回妊娠出産子育て基本調査によると、父親は「子どもの事でどうしてよいかわからない時がある」という不安を 28.6%の割合で感じている<sup>(23)</sup>という結果が示されており、父親が育児を行う上で自信を持って能力を発揮できない現状も明らかになっている。準備期間のある女性でさえ、家事・育児を担うとなったとき、子育ては未知の世界で、子育て支援として、子どもへの関わり方、遊び方等が具体的に必要とされている。まして男性はこれまで子育てについて考えることがなかったため、父親が子育てに参加するためには、母親よりも丁寧な子育てのノウハウを必要としている<sup>(24)</sup>。子育てについての具体的なイメージを持っていない中で第一子が生まれ、実際に子育てに直面し、家事育児の具体的な内容がわからないといった状況がある。それが、女性がそれほど不満に思っていないにも関わらず、パートナーに満足してもらっていないと思う育児期の男性が多く、自分自身の家事育児行為に自信のない回答の原因になっていると考えられる。

### 3.4.4 夫婦の会話の量と質の必要性

役割認識重複度について関係する要因は、役割分担の話し合いの有無と、子どもや育児に関する 1 日平均の会話時間であった。子ども・育児に関する 1 日平均の会話時間が高いと役割認識重複度が高く、役割認識重複度が高いと育児役割分担への満足度が高いという結果から、お互いの満足度を高めるために、今回の調査結果より、家事育児に関する「会



話」の時間をとることの必要性が示された。本村ら（1985）は、対話時間の長さは、父親が育児参加していると同等の意味をもち、夫婦関係における相互作用の一部として“夫の妻への協力”という意味を含む<sup>(25)</sup>と言っている。

不満を持ち、なおかつ役割分担についての会話をしていないと認識している14名のうち13名(92.9%)が女性であった。女性の方が多く不満を感じているのは、普段の家事育児時間が男性よりも長いため、「相手にも自分と同じくらいやってもらいたい」と男性に期待するものの、それに見合った行動を男性がとれていないからであると推測できる。この場合、家事・育児の役割分担に関する決め方は、双方の期待を言葉にすることなく察知して、育児役割を認識し、自然に決め、行動していることが推察される。会話をしていないため双方の期待の間にある不一致について認識し合うことができず、そのずれ違いから不満が生まれる。これは父親と母親との役割期待に対する意志疎通を意図的に行っていない現れと解釈でき、この不一致を解消するためにも、家事育児についての会話時間の確保が必要であると言える。

また、考察内で出た問題についての解決法の一つとして、「会話」があげられると考える。

まずは、女性の望む情緒的サポートと認識の差についてである。母親のストレスを緩和するには、夫からのサポートを得ることと夫婦の対話が重要な要因として考えられる。すなわち、夫が子育ての中で「人生の重要なパートナーであるという役割を担う」ことと同時に、夫婦が互いに理解を深めるようなコミュニケーションスキルを身につけることは母親の精神の安定性を図ることができると推測する<sup>(26)</sup>。夫婦間でコミュニケーションをとり、その中で、「妻の良き理解者」となることで、母親のストレスケアにも繋がるのではないかと考える。

二つ目には、育児期の男性が抱える子育ての不安も、母親との会話時間を多く設けることで解消されるのではないかと考える。夫にとって妻は、子育てをしていく中で最も身近なお手本であるともいえる。女性の自由回答にあるような夫への感謝や要望を直接伝える事が、男性の家事育児に対する不安の解消法のひとつであると言える。男性がこのような不安を感じることなく家事育児をするためにも、夫婦間のコミュニケーションを通じて、妻が「夫の良き理解者」となる等、妻からのサポートも重要な要素ではないだろうか。

ここまで、夫婦間の会話を多く設けることが必要であると述べてきた。子育てや子どもに関する会話時間を多く設けることで、お互いの求めているもの、価値観を双方が認識し、役割認識を共有することが重要であり、それに加え、お互いの不安を取り除くケアをすることで満足のいく育児ができるのだ。

しかし、男性は育児などの役割分担の話し合いをしたという男性が65.9%と多く、女性が42.2%と少ない。つまり、男性は話し合いをしたつもりになって家事育児をしているが、女性は話し合いをしたとは思っておらず、女性からは、男性は好き勝手にやっていると見られているということである。これでは、女性から不満が出てしまうのも無理はない。このギャップを埋めるためには、お互いの意識の統一が不可欠である。

今後は、この会話の量を増やすために、両親の「会話」をもっと意欲をもって臨めるような環境づくりが必要である。また、菅原（2000）は、父親の役割に関する教育指導において、父親の育児に対する姿勢を、母親が感じ取れるようにすること、具体的な協力範囲を夫婦で決めていくことを提案している<sup>(28)</sup>。したがって、男性の考えていることを伝え、女性がしっかりと認識するといった、会話の質の向上が必要だと示唆できる。

## 第4章 インタビュー調査

### 4.1 調査目的

インタビュー調査では、文献調査や、アンケート調査からは見えづらい、実際に育児をしている男性が、配偶者の意識や考えをどう察知したのか、家事育児を自分事として捉えるためには何が必要であったのかを知り、男性のよりよい育児参加のために必要な要素を探ることを目的とする。アンケート調査にて、満足度を高めるため、役割認識の重複度を高めるためには、会話時間が必要であることを示した。新たに、母親のストレスケアや、男性の抱える不安等の問題における解決法としても、「会話」の必要性が示唆された。しかし、父親が自主的に家事育児に取り組むために必要な要素はアンケートからは読みとれなかった。そこで、実際に育児をしている男性にインタビューを行うことで、よりよい育児参加をするために夫婦間で必要なものはなにかを探り、アンケート結果と共に考察する。

### 4.2 調査方法

#### 4.2.1 対象者

対象者は、小学校就学前の子どもを持ち、育児に関わりを持つ男性とした。対象者の選定は、知り合いを通じて紹介をしていただいた。具体的には、対象者の内2名は、筆者の知り合いで、実際に育児をされている方にお話を伺った。もう1名は、研究員の方に紹介していただいた。他の2名は、同研究会のメンバーのお知り合いを紹介してもらった。今回インタビューをした方々は、主に育児に積極的に関わり、よりよい育児参加をしている男性の例として選定した。企業のサポート体制については、5名の内3名(A,B,C)は所属する企業は違うものの、「くるみんマーク」取得企業であり、サポート体制も整っていると言える。1名(D)は所属する企業は、育児休業制度は存在するものの、制度を利用する対象者が非常に少なく前例はない。もう1名(E)が所属する企業は、育児休業制度は存在するものの、男性が取得した前例がなかった。

いずれの場合も、調査で得られた結果については、すべて匿名で論文に記載させていただくなど、個人情報の取り扱いについて詳しく説明し、了解を得たうえでインタビュー調査を行った。対象者の属性は以下の通りである。

表 10：対象者の属性

対象者	年齢	雇用状況	配偶者の雇用状況	子どもの人数	育児休業取得
A	30代後半	正社員	正社員	2人	1人目の時に11日間
B	30代前半	正社員	正社員	1人	無し

C	30代前半	正社員	正社員	2人	2人目の時に2か月間+時短2年
D	30代後半	正社員	正社員	2人	無し
E	30代前半	正社員	正社員	1人	12日間

#### 4.2.2 分析方法

本調査の目的に沿って、質問項目についてはあらかじめ用意していったが、それらの質問以外にも自由に発言を受け入れたため、一人当たりのインタビュー時間は50分～90分であった。結果をまとめるにあたり、5名のインタビュー内容を録音したものを逐語録として起こし、カテゴリーに分類したうえで、「会話」の重要性や、男性の育児参加について自主性を促すもの、育児休業への意識についてまとめた。そして整理した中から、よりよい男性の育児参加に必要なものについての発言を抽出し、考察を深める。

#### 4.3 分析結果

本調査では、男性がよりよい育児参加をするために必要な要素として、「価値観の一致やビジョンをすり合わせ」「育児行動に主体性を持って取り組む事」の2つのカテゴリーに分類できた。また、「育児休業取得を促した要因」と「育児準備や両親学級の意味」についても有用な発言が得られたのでここにまとめる。「価値観の一致」をする際に行った行動として、「会話」と「相手の行動や生活から気付く」という2つのカテゴリーに分類でき、その中でも特に「会話」の重要性が示唆された。「男性が育児に主体性を持って取り組む」ために必要な要素として、「子どもとの触れ合い」と「女性のサポート」の2つのカテゴリーに分類でき、更に「女性のサポート」を「女性が男性を長い目で見る事」「女性の男性への動機づけ」の2つのカテゴリーに分類できた。

「育児休業取得を促した要因」としては、「職場の空気」「育児休業取得の目的意識の芽生え」の2つに分類できた。

##### 4.3.1 価値観の一致・ビジョンのすり合わせ

夫婦の価値観の一致については、「夫婦の価値観の共有が必要」(A)や、「家のこれからのビジョンがあるということが重要」(B)「双方の意識の統一が必要」(E)といった発言があった。これらの発言より、お互いがお互いの意識を知り、理解し合うといったことが必要であることが改めて示された。この結果は、前章のアンケートの、夫婦の満足度を高めるために役割認識の重複度を高める必要があるといった結果と一致するものであり、夫婦がそれぞれ思っている事、家事育児への価値観の一致の必要性を訴えるものである。

「価値観の一致」をする際に行った行動に対する発言を表 11 にまとめた。価値観を一致させるために、主に「会話をしている」という発言が目立った。会話の内容については、価値観をすり合わせるための話し合いや、役割分担を決めることを目的としたものが主であった。また、「相手に感謝の気持ちを伝えようとしている」(B) であったり、「多少の不安を聞く事ができたと思う」(C) にあげられるように、女性の不安やストレスを軽減することにも「会話」が用いられていた。「会話」が価値観の一致に用いられることは、役割認識重複度が高い人は、子どもや育児に関する時間が長かったという前章のアンケート結果を裏付けるものである。また、母親のストレスを緩和するには、夫婦の対話が重要な要素であるという前章のアンケート結果からの考察と同様のものであると言える。五十嵐ら(2001)は、父親の役割として「妻のよき理解者となる」が最も高いことから、子供の話をするなどのコミュニケーションがよく図られていることで評価が高くなる傾向が認められた<sup>(17)</sup>としており、本調査の結果もこれを支持するものであると考える。

その他に、女性の行動や生活から相手が求めているものを察し、行動したという発言もあった。時間的に見ると、A の発言は、育児休業を取得した際のもので、C の発言は育児休業を取得し終わった現在の発言である。筆者は、育児休業を経て家事育児を主にこなし、女性の気持ちに少しでも近づけた事で、相手が求めるものを察することができたと考える。

表 11：価値観を一致させる・ビジョンをすり合わせるための行動

カテゴリ	発言	発言者
会話をする	家事育児についての全体像を理解していなかったので、家事育児や家庭のこれからのビジョンについて話し合い、すり合わせを行った。	B
	最初は言われないと気付けなかった。しかし、子ども二人にご飯を食べさせ、二人をお風呂に入らせ、寝かせるのも一人でやる奥さんを見て、これはまずいと思い、話し合った。	C
	夜ご飯の時間や子どもが寝た後に頻繁に話す。会話のほとんどは子どもに関する内容。また、家事の部分で最初にしっかり分担をした。	D
	出張が多くあるので、いつ出張をするかといった事務連絡をする。嫁は現在育児休暇をとっているので復職すると月末に忙しくなる事を伝えているし、自分も理解している。	D
	役割分担を決めるときに、家事（掃除・洗濯・料理）について話し合った。特に洗濯については、奥さんにこだわりがあったので、そこは相手に任せ、その他を協力していくことになった。	E
相手の行動や生活から気付く	妻が育児休業をとっていたときは、定時で帰るだけでありがたいと言われていたが、復職した後は共働きで立場が対等になり、定時に帰るだけでは不満に思うと思い、できることはどんどんやるようになった。	A
	現在は、毎日の生活の中で、基本的に奥さんは睡眠が足りていなかった	C

	ので、子どもを連れだして奥さんを休ませたり、女子会に行かせることでリフレッシュをしてもらっている。また、洗濯ものを取り込んだり、食器洗いなどを自分が気付けてやったりと、自分が気付いた事をお互いにやっていてうまく回っている。	
--	---	--

会話機会の創出については、多くが積極的に話す機会を設けていることがわかった。主な発言を表 12 にまとめる。これは必ずしも男性発信である必要はないが、積極的にお互いのことを理解し、価値観を一致させるために、コミュニケーションをとっていくという意識が重要である。渡邊ら（2001）は、夫婦が一体となって織りなす育児の意味や役割分担について対話できる機会を意図的に作る事が重要である<sup>(20)</sup>と述べており、忙しい中でも時間を作り、会話機会を実際に作っていくことが必要である。

表 12：会話機会の創出への積極性

カテゴリ	発言	発言者
積極的な会話への心掛け	なにかしてもらった時には、相手に感謝の気持ちを伝えるようにしている。自分も言われると嬉しいし、相手もそうだと思うから。	B
	会話は非常に重要であると考えており、忙しい時でも積極的にとろうとしていた。奥さんが気を遣って、遅くに帰っても待っていてくれて、その日に会った事を話したりした。そこで多少の不満を聞く事ができたと思う。	C
	育児について取り上げられているテレビ番組などを録画し、それを見ながら頻繁に二人で話している。	D
	普段から事務的な連絡ではあるが、忙しくても予定を共有するように心がけている。	E

#### 4.3.2 育児行動に主体性を持って取り組む

インタビュー内の発言に、『ゴミ出しなどの家事手伝いをした』と言っても、そのゴミの分別からやっているのか、妻に『これやっておいて』と言われたからやるのか、ここには大きな違いがある。(C)「土日に子どもと遊びに行ったとしても、今まで触れ合う時間が少なかったから頑張って行くのと、嫁に『子どもと遊んできて』と言われて行くのは違いがある」(D)とあるように、ただ行動すればよいものではなく、男性が自主性を持って育児に参加する必要があることが示唆される。

そこで、男性が主体的に家事育児に取り組むことを促す要因として、「女性のサポート」と「子どもとの触れ合い」という発言が見られた。また、「女性のサポート」は更に、「女

性が男性を長い目で見ること」「女性の男性への動機づけ」に分類できた。表 13 に発言、発言者と共にまとめる。

インタビューの中では「子どもができてから価値観のすり合わせをする家庭が多いと思う。しかし、女性がそれを諦めてしまっている家庭も多い気がする。」(B)「いないと思っている方が楽、もうだめ、と諦めてしまっている人もいる。」(C)のように、女性が男性へのアプローチを諦めているといった発言があった。アンケート結果を見ると、「育児の役割分担についての話し合いを定期的にしたと思いますか？」の問いに対し、「思う」と答える男性は 32 名 (72.7%) いるのに対し、女性は 22 名 (48.9%) と男女間に差が出ていた。さらに、定期的に話し合いたいと思わない女性 23 名の内、子どもや育児に関する会話が 1 日平均 30 分未満の女性は、16 名 (69.6%) であった。これは、女性が男性に対して、家事育児への要求や、話し合いを諦めてしまっていると考えられ、インタビュー結果はこの前章の結果を裏付けるものである。女性が諦めてしまえば、男性側が意欲的に行動しようとした場合にも、そのチャンスを不意にしてしまう。また女性からの意見や行動がないため、男性はなんとなくの思いつきでの行動になってしまい、その結果、女性の求めているものとは違ってしまい不満が生まれてしまうこともあるだろう。そこで、女性が男性に対して諦めを持たないことが重要であると言える。

「女性のサポート」が必要という発言の中には、「女性の男性への動機づけ」がサポートになっているというものもあった。「奥さんが育児の全体像とどうやっていくかをしっかり説明してくれた。そうしてもらったおかげで、同じ目線で話をすることができ、その後は自分の意見を持って会話できるようになった」(B) これは、女性の動機づけのおかげで男性自身が成長でき、その後主体的に物事を考えられるようになった良い例である。初めは、夫婦の中で育児に関する若干の主従関係がある。(子育てについて準備期間に多くの事を考え、調べ、学んでいた女性が主に上にいることが多い) そこで女性は、「家事育児参加をする意欲はあるが、実際どうやればいいのかやり方がわからない」といった育児期の男性が抱える子育てで不安に対して、男性をコーチングし導く事によって、男性自身の主体性を引き出すことができる。相手を観察し、長所を見出し、それを伝えていくことが必要であり、それによって相手がいい印象を受け、逆に何らかの形で返そうとすることが相乗効果となって現れてくる<sup>(28)</sup>。ここから、女性の男性を肯定的に受け止める意識を養うと共に、それを諦めずに続けていくことが、男性を主体的に育児参加させる一つの要因であると考えられる。

「子どもとの触れ合い」がきっかけとなり、主体的に育児に関わることができたという発言も見られた。これは主に、「親性」の発達によるものであると考える。「親性」とは、女性特有の特徴と育児への適性とを直結させた「母性」と、男性の子育てにおいて果たす機能や役割を表す「父性」を合わせたものである。女性の社会進出に伴い、性別役割分担への批判が高まるにつれ、子どもを産み育てる能力は性差に関わらないといった考え方が現れ、新たに「父性」「母性」に変わるものとしてそれぞれの「親性」といった用語が用いられるようになった<sup>(29)</sup>。小笠原 (2010) は、男性は、我が子と様々な形で関わり、育児に参

加してくことで「親性」の中に含まれる親としての自覚や親としてどう役割を果たすべきかという意識を高めていくことができると示唆している<sup>(29)</sup>。子どもと実際に接する機会をもち、体験的に子育てを学ぶ機会が増えることで、その価値や必要性を見出し、自ら積極的にやる気を持って行うことができると考察できる。

表 13 : 男性が育児を主体的に取り組むための要因

カテゴリ	発言	発言者
女性が男性を長い目で見ると	仕事とのバランスで家事育児が疎かになってしまうこともあるが、それをしっかり伝えているので、そこは長い目で見てほしい。	A
	子どもができてから価値観のすり合わせをする家庭が多いと思う。しかし、女性がそれを諦めてしまっている家庭も多い気がする。	B
	基本的に男性は最初なにもできないので、もっと長い目でのサポートをしてほしい。	C
	自分がいくらやっているつもりでも、奥さんがそう思っていないのならイクメンとは呼べない。また、奥さんがイクメンを求めているのであれば、それを諦めない事も重要だと思う。いないと思っている方が楽、もうだめ、と諦めてしまっている人もいます。	C
	家事の分担にしても一時で見るものではない。忙しい時もある、そうでない時もある。もっとロングスパンで考えてほしい。	E
女性の男性への動機づけ	奥さんが育児の全体像とどうやっていくかをしっかり説明してくれた。そうしてもらったおかげで、同じ目線で話をすることができ、その後は自分の意見を持って会話できるようになった。	B
	言われて気付く事が多かった。奥さんにコーチングしてもらった。	C
	家事育児がうまくいかなかったときに、「いいよ、もう私が全部やる！」と投げ出さずに、「ありがとう、でももう少しこうしてくれるともっといいよ！」とアドバイスのように言ってくれた。	C
	女性の方が上にいるのが耐えられないというプライドを持った男性もいる。嫁にやらされている感ではやる気も起きないから、言い方が重要だと思う。	D



子どもとの触れ合い	子どもと接する時間が多くなると、子どもがいい道に進むのも、悪い道に進むのも自分次第であるため、言葉遣いや姿勢を気にするようになった。	A
	自分がやるべきことに気付いて動くためには反復が必要。子どもと触れ合う多くの時間を通して、子どもに〇〇してあげたい。という気持ちがどんどん湧いてきた。	C
	子どもを楽しませたいという気持ちが大きく、子どもと触れあう中で、子どもが自分のところに来てくれると嬉しい。どうすれば自分のところに来てくれるのか、嫁とは違ったアプローチ方法を探そうと意欲が湧いてくる。	D

#### 4.3.3 育児休業に関する認識と取得

育児休業の取得については、「子どもと接する時間が多くなり、子どもがいい道に進むのも、悪い道に進むのも自分次第であるため、言葉遣いや姿勢を気にするようになった。」(A)「育児休業をとることで、子どもと触れ合う時間が多くなるので、奥さんの気持ちになることができる。そこで寝かしつけがどれだけ大変かを学び、夜遅く帰ってきて子どもを可愛いかわいいて起こしてしまうといったことがいかに負担をかけていたか思い知った。」

(E)のように、子どもと触れ合う時間が多くなることで、女性の気持ちや育児の大変さに気付いたことがメリットとして伺える。それに伴って、自分自身の成長にも繋がっている。

アンケートの結果からも、育児休業を取得したいと考える男性は 70.5%と非常に高いものとなっている。今回インタビューをした 5 名中 3 名が実際に育児休業を取得していた。取得に際して、環境の視点で最も重要と感じたものは、3 名中 2 名がきっかけは上司の勧めであった事からも「職場の空気」であった。平成 23 年度東京都男女雇用平等参画状況調査結果報告書—従業員調査結果—によると、男性の育児休業取得の課題として「職場がそのような雰囲気ではない」の割合は 33.3%であり、取得を阻害するひとつの要因としてあげられる<sup>(30)</sup>。しかし、取得を本当に望むのならそれを諦めてはいけない。「時短の事例のない中で、取得のきっかけは上司であったが、男性が時短を利用する事例がない中で、初めて時短を利用した。それまでに培ってきた自分の信用が大事。そういうのが全くない時期に時短や育休をとれていたかという難しい。」(C)「自らのキャリアプランを考える中で、育児休業を取得しようと考えていた。そこで上司に自分の仕事をどうみんなに振り分けられるかをプレゼンし、また育休は国からもお金が出るし、くるみんマークの制度もあると、会社側のメリットについても伝えた。」(E)にあるように、キャリアプランを考えていく中で、育児休業を取る意味を理解し、男性がそれを積極的に求め続けることで、実際の取得

に結びつくこともある。以上のことから、個人の意識な視点から、個々人の意識の向上と諦めずに積極的な行動がもちろん求められるが、その前提として、「意識はあるが、制度を利用できない」といった人のために、社内の環境を変える等の変革が必要であるとする。

また、「家族円満のため、奥さんに健康でいてほしい、奥さんの心と体力のために、というのが育児へのモチベーション。そのためにできることは何か?ということを中心に考えて行動している。」(A)「男性が時短を利用する事例がない中で、初めて時短を利用した。取得のきっかけは上司であったが、「今後のキャリアは?」「自分だけ休んで他の人と対等にやっていけるか」等を考えたが、結局は家族にとって一番いいと思い、育児休業と時短をすることに決めた。」(C)という発言にあるように、ただ育児休業を取得することが目的ではないことが伺える。第一の目的として、奥さんのためにできること、家族のためにできることをするということがあり、実行するための手段として育児休業を取得するのだ。このような意識は、自主的に家事育児に参加しようという気持ちから生まれるものと推測される。仕事を一時期休むといった決断は、多くの男性が難しいと考える問題である。育児休業を取得しなかった理由として、職場の人に迷惑がかかるから、今後のキャリアに影響が出るから、という理由があることから、そのことが伺える<sup>(30)</sup>。しかし、この家庭と仕事との折り合いを自分の中で付け、家族のために主体的に家事育児に関わろうとする男性が育児休業を取得している。このような、「育児休業取得の目的意識の芽生え」が、育児休業の取得を促す一つの要因であると考えられる。

また、意識の問題として、「育児休業中の家事育児への関わり方」といったものが最も重要であると感じた。「育休をとったからといって、休暇中に何をすることが問題。」(B)や、4.3.2中のC、Dの発言より、育児休業中には、普段よりもより家事育児に関わる時間が多くなり、その関わり方に焦点が当てられている。発言内でも、主体的な男性の行動が必要であることが示唆されている。アンケートの女性の自由記述からは「ママへのケアも含めて育児休業を取得してもいいと思う」「新生児のころは特に実家から離れて生活していると、体力的にも精神的にも辛い事が多かったように思うので、その短期間だけでも育児休業をとってくれたらもっと助かったと思う。」といったように、男性に育児休業を取得してもらい、女性のサポート的役割を担ってほしいということが記述されている。

つまり、「育児休業を取得する」ことが目的や目標なのではなく、育児休業を取得した後、今まで以上に主体的に、パートナーの手助けや子どもとの関わるようになることが真の目的と言えよう。

表 14：育児休業取得を促した要因

カテゴリ	発言	発言者
職場の空気	取得に際しては、せっかくの機会だからと背中を押してもらったかたちで上司の勧めももらった。	A
	仕事を中心の生活になっており、家族のために働いているはずなのに結果的に不幸にしていると感じ、上司に相談したところ、育児休業制度を紹介してもらった。男性もとれるとは知らなかった。そういう意味で現場の空気がかなり大きいと感じた。	C
育児休業取得の目的意識の芽生え	家族円満のため、奥さんに健康でいてほしい、奥さんの心と体力のために、というのが育児へのモチベーション。そのためにできることは何か？ということを中心に考えて行動している。	A
	男性が時短を利用する事例がない中で、初めて時短を利用した。取得のきっかけは上司であったが、「今後のキャリアは？」「自分だけ休んで他の人と対等にやっつけられるか」等を考えたが、結局は家族にとって一番いいと思い、育児休業と時短をすることに決めた。	C

#### 4.3.4 育児準備や両親学級の意味

ここでいう「育児準備」というのは、子どもが生まれる前に自主的に育児の方法について調べたり、実際に自分が育児をするようになったときのための行動のことである。

表 15：育児準備に関する発言

	発言	発言者
育児準備の有無について	特に何もしていない	A
	妊婦体験と沐浴体験を行った。	B
	妊婦体験を行った。	C
	子どもが生まれる前はまったく育児をする自分が想像できなかった	D
	子どもが生まれる前までは、育児に全く興味がなかった	E

5名中3名が、実際の育児に直面するまでは自分が育児にどう関わっていくかについて、考えていなかったようだ。しかし、妊婦体験をしたCは、「妊婦体験はしたが、大変さを分かった気にはなったが、それが実際の育児に大きく影響は出ていないと思う」と発言しており、Bは、「妊婦体験と沐浴体験をしたが、それは部分的なノウハウのみを教わったもの

であり、その前に、妊娠期の体の変化や、奥さんの変化を学ぶ必要があると感じた。例えば、産熟期に水仕事をして体を冷やす事が、その後の回復に影響が出てきてしまうということを男性が知っていれば、自ずと水仕事をしなければならぬとなるはず。」と発言している。沐浴を例にとると、両親学級等で沐浴のやり方を教わったから沐浴をするのでは、本当の母親のため、子どものための行動をとることはできないと考える。分担をしたからやるのではなく、母親の体を冷やしてはいけないから、男性の手の方が大きく力があり沐浴に適しているということを理解したうえで、沐浴の仕方を学ばなければならない。

また、沐浴を通じた男性の変化を教えていかなければならないと考える。子どもと実際にスキンシップをとることで、赤ちゃんとの絆を深め、そのことが男性の育児への自主性を促す。妻の事を考えた育児行為をすることで、妻との絆も深める事が出来る。育児行為ひとつをとって見ても、表面的な意味だけでなく、このような隠れた意味も存在するのだ。そのきっかけの一つが両親学級であると考えられる。五十嵐ら(2001)は、父親の参加を促す方法として父親としての準備期(妻の妊娠中)から育児の大変さ、母親への負担の大きさ、精神的支援の必要性などを理解してもらうことが必要である<sup>(17)</sup>と述べている。今後の両親学級は、具体的な育児のやり方やノウハウだけを教えるのではなく、なぜそれをする必要があるのかを教える必要があり、男性も体験を通じて、育児行為をする意味を学ぶ必要があると考える。

#### 4.4 4章のまとめ

本調査では、文献調査や、アンケート調査からは見えづらい、実際に育児をしている男性が、配偶者の意識や考えをどう察知したのか、家事育児を自分事として捉えるためには何が必要であったのかを知り、男性のよりよい育児参加のために必要な要素を探ることを目的とした。

結果として、配偶者の意識や考えを察知し、価値観を一致させるために、アンケート同様、「会話」をすることの必要性が示された。また、家事育児を自分事と捉え、主体的に行動するためには、実際に子どもたちに触れ、その価値や必要性を見出すことが必要であると示唆された。そのサポートとして、「女性の関与」も重要であることがわかった。

育児休業の取得においては、育児休業を取得する際の目的に重点を置いて考察した。育児休業は期間限定のものではなく、育児休業が適応されない長い期間続くものである。つまり、男性は育児休業を取得することが目的なのではなく、奥さんのためにできること、家族のためにできることをするのが真の目的であると考えられる。主体性を持って、それを実行するための手段として育児休業を取得するといった目的意識が重要である。

両親学級のあり方としては、具体的な育児のやり方やノウハウだけを教えるのではなく、そこに至るまでの母親への負担の大きさや男性の必要性を学ぶ場であるべきだということを提案した。育児休業についても同様に、具体的なノウハウを学ぶ事が目的なのではなく、

赤ちゃん、妻との絆も深め、自らの自主性を促すことが真の目的なのである。男性の準備期にこのような理解をしておくことで、その後の価値観のすり合わせや、相手の要求を汲み取ることがスムーズに行えると考ええる。

## 第5章 総括・展望

### 5.1 本研究全体のまとめ

本研究では、小学校就学前の子どものいる家庭生活における夫婦双方が満足する男性の家事育児参加を促すには、どのような要素が必要であるかを探ることを目的とし、そのために文献調査、アンケート調査、インタビュー調査を行った。

男性の考える育児は主に家事に重点が置かれており、女性の男性に求める育児は子どもとの触れ合いであることから、両者の間に差がある事が明らかになった。その差が生まれる原因として、女性の社会進出に伴う男性の意識の変化が一つの要因であることが推測された。そして、役割分担満足度には、役割認識の重複度の高さが関係しており、その役割認識の重複度を高めるためには、役割分担の話し合いや、子どもや育児に関する1日の平均の会話時間が必要であることが明らかになった。

また、多くの母親が「子どもと接してほしい」と父親としての役割を求めるとともに、同じ育児をするパートナーとして「情緒的サポート」を望み、逆に、育児期の父親は、自分の育児に自信が持てていない現状があった。「情緒的サポート」と「育児期男性の不安」も「会話」によって、解決されるものであると推測され、お互いがお互いのニーズを把握し、「良き理解者」として、育児を一緒に行っているという気持ちを育むような情緒的サポートをし合える関係を築いていく事が重要であると言える。

男性がよりよい育児をするために「価値観の共有」「会話時間と質の確保」「主体性の喚起」「目的意識の芽生え」「子どもとの触れ合い」の5項目を必要な因子として示し、より多くを満たすことが必要であると本研究では結論付ける。

「価値観の共有」については、第3章のアンケート結果より、役割認識の重複度が満足度に関係することや、第4章のインタビュー結果からも、「夫婦の価値観の共有が必要」といった回答が多くみられたことから、お互いがお互いの意識を知り、理解し合うということが必要であると考えられる。

「会話時間と質の確保」については、第4章のインタビュー結果から、母親のストレスを緩和するには、夫婦の対話が重要な要素であるということも示唆され、第3章のアンケート結果から、役割認識の重複度を高めるためには、子どもや育児に関する会話時間をとる必要性が示された。しかし、男性は話し合いをしたつもりになって家事育児をしているが、女性は話し合いをしたとは思っていないというアンケート結果から、男性の考えていることを伝え、女性がしっかりと認識するといった、会話の質の向上が必要だと考える。

「主体性の喚起」については、第3章の女性の自由記述において“自発的に”“もうちょっと”という言葉が多く使われていたように、女性は現状の育児分担にはある程度満足しているが、理想は現状よりも少し高い位置にあり、育児・家事により積極的に取り組んでほしいと思っていると解釈できる。また、第4章の結果から、男性自身も主体性を持って育児に参加することの必要性を訴えている。男性が主体性を持つためには、「女性が男性を長い

目でみる」ことや「女性の男性への動機づけ」など、女性のサポートが必要であることが挙げられた。男性が動かないから諦めるのではなく、現在の父親行動を肯定的に受け止め、男性をやる気にさせる言い方や、普段の感謝の言葉等かけるなど、態度で示すことで、主体的に行動するようになると言える。

「子どもとの触れ合い」については、第3章の結果より、女性は男性に子どもとの触れ合いを求める声が多かった。また、第4章の男性の自主性を促す要因の一つとしても子どもと触れあうことが示唆された。子どもと実際にスキンシップをとることで、自分との絆を深め、そのことが男性の育児への自主性を促す。先行研究でもあげたように、平日は東京の父親は子どもと過ごす時間が短い、休日は東京の父親は子どもと過ごす時間が長いという結果も出ている。休日に子どもと触れ合う時間を多く設け、妻のため、子どものため、自分のための育児参加をすることが求められていると考える。

「目的意識の芽生え」については、第4章の育児休業の取得や、両親学級参加の裏には、奥さんのためにできること、家族のためにできることを考え、自らの主体性を促す事が真の目的であると考え。主体性を持って、それを実行するための手段として育児休業を取得するといった目的意識が重要である。男性の準備期にこのような理解をしておくことで、その後の価値観のすり合わせや、相手の要求を汲み取ることがスムーズに行えると考え。

## 5.2 本研究の限界と今後の展望

本研究では、89名のアンケートと5名のインタビューを通して、量的質的に男性の育児について分析した。「役割分担満足度」には、「役割分担の双方の認識の一致」が必要であり、認識を一致させるためには「会話」の必要であることについて、データをもとに示す事ができた。また、5人という決して多くはない対象者の発言からも共通項が抽出でき、今後の男性がよりよい育児参加をするために役立つと感じている。

しかし、対象者選定において、「くるみんマーク」を取得した企業の方や知人の紹介でアンケートにご協力していただき、元々育児への意識の高い人たちへの調査となってしまう、これが全男性の意識傾向を反映しているというには限界がある。また、育児は本研究でもいうように、夫婦共同で行うものである。したがって、男性のみのインタビューでなく、女性、あるいは夫婦揃ってのインタビューも必要であったと考える。そして、育児とは正解のないものであり、この結果がすべての人に当てはまるかどうかは未知である。そのため本研究は、男性のよりよい育児参加を促す要因のひとつとして、今後につながる研究であると位置づける。近い将来、本研究から得られた情報を活かし、個人個人に合わせた育児参加の実現を期待する。

## おわりに

本研究は、筆者の研究会での経験がきっかけであった。

筆者は、所属する秋山研究会のプロジェクトにて、山形県鶴岡市の小学生たちと交流する機会があった。「自由研究おうえん隊」と名付けられたこのプロジェクトは、小学生の子どもたちとともに、「食事」や「からだ」についての学びを通じて、命の大切さについて考えるプロジェクトである。子どもたちの興味を喚起しつつ、自分たちの伝えたいメッセージを届けるためにはどうすればよいのかが悩みどころであった。そこで、子どもたちの目線に立って、物事を考えることで、当日の子どもたちの学びや笑顔に繋がったと考える。「お兄ちゃんたちと学んだ今日のことは、ずっと忘れられません」その子どもたちの感想を聞いた時、私は、自分自身が子どもたちの心に何かを残せた事、子どもたちの将来に影響を与えられたことに、今までにない嬉しさややりがいを感じた。この経験は、私に初めて「父親」というものを意識させ、同時に、この時に感じた嬉しさを多くの人に感じてほしいと考えるようになった。

しかし、たまたま子どもと触れ合う機会を持ち、「父親」「育児」を意識するようになったが、子どもと滅多に触れ合う機会のない他の学生は、自分が父親になる、育児をするというイメージは全くわからないだろう。「イクメン」という言葉が流行り、男性も育児をするのが必然とも捉えられている。今後は育児に参加するだけでなく、質の伴った育児参加を求めるようになるであろう。社会人となり、将来自分が父親になったとき、子どもの育児にどれだけ携わる事ができるのか、それ以前に、育児のやり方とはどういったものだろうか、妻と共同で育児を行うにはどうすればよいのか、ということについて全くイメージがない場合、質的なニーズにこたえることはできないと考える。

この研究が、育児を自分事して意識し、より良い育児に繋げるための一つの助けとなる事を願っている。



## 謝辞

本研究にあたり、格別のご指導を頂きました秋山美紀先生・武林亨先生・内山映子先生、本当にお世話になりました。先生方の温かく、時には厳しいご指導がなければ、本研究の実現はありませんでした。非常に恵まれた環境で学び、卒業研究を執筆できた事、大変光栄に思います。

またお忙しい中、アンケートにご協力くださった89名の皆さま、1時間以上にも及ぶインタビューにご協力くださった5名の皆さま、本当にありがとうございました。皆さまのご協力なしにはこの研究は完成することはありませんでした。皆さまのご意見を聞き、じっくりとお話をさせていただいた時間は非常に意義深く、私にとって「ずっと忘れられない」貴重な時間となりました。

最後に、秋山研究会の皆さまに感謝いたします。秋山研究会のメンバーには、研究へのアドバイスを頂いたり、アンケートにご協力してくださる方、インタビューにご協力してくださる方を紹介していただきました。

本当に皆さま、ありがとうございました。

## 引用・参考文献

1. 厚生労働省,「人口動態統計」,人口動態総覧(率)の年次推移  
[http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei10/dl/05\\_h2-2.pdf](http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei10/dl/05_h2-2.pdf)
2. 内閣府,共生社会政策統括官少子化対策「平成 23 年版 子ども・子育て白書」第 1 部、第 2 章、第 1 節 3 諸外国における出生率の状況  
[http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2011/23webhonpen/html/b1\\_s2-1-3.html](http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2011/23webhonpen/html/b1_s2-1-3.html)
3. 山西, 裕美. "父親の子育て参加規定要因についての研究 -両親の就労形態との関連で-." 社会関係研究 16, no. 2 (2011): 59-89.
4. 内閣府,内閣府男女共同参画局,「平成 20 年版男女共同参画白書」第 1 部、第 2 章、第 3 節 雇用環境の変化  
[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/h20/zentai/html/zuhyo/zuhyo1\\_02\\_14.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h20/zentai/html/zuhyo/zuhyo1_02_14.html)
5. 内閣府,「平成 24 年度男女共同参画社会に関する世論調査」女性の社会進出に関する意識について  
<http://www8.cao.go.jp/survey/h19/h19-danjo/index.html>
6. 内閣府,内閣府男女共同参画局,「平成 20 年版男女共同参画白書」第 1 部、第 2 章、第 1 節 就業者をめぐる状況  
[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/h20/zentai/html/zuhyo/zuhyo1\\_02\\_01.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h20/zentai/html/zuhyo/zuhyo1_02_01.html)
7. 内閣府,共生社会政策統括官少子化対策「平成 23 年版 子ども・子育て白書」第 1 部、第 2 章、第 1 節 4 結婚、出産、子育てをめぐる状況  
[http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2011/23webhonpen/html/b1\\_s2-1-4.html](http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2011/23webhonpen/html/b1_s2-1-4.html)
8. 三浦 さつき. "男性の育児参加の規定因に関する研究." 福山大学こころの健康相談室紀要 no. 5 (2011): 27-35.
9. 厚生労働省,「平成 23 年度雇用均等基本調査」  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-23r-03.pdf>
10. 厚生労働省,「今後の仕事と家庭の両立支援に関する研究会報告書～子育てしながら働くことが普通にできる社会の実現に向けて～」
11. 中央調査社,2012,「父親の育児参加に関する世論調査」
12. 共生社会政策統括官少子化対策,2010,「平成 21 年度インターネット等による少子化施策の点検・評価のための利用者意向調査」
13. 総務省「社会生活基本調査」(平成 23 年)  
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou2.pdf>

14. 内閣府,「仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) レポート 2013~その残業、本当に必要? 上司と部下で進める働き方革命～」第 3 章、第 4 節 多様な働き方・生き方が選択できる社会に関する数値目標設定指標の動向 p168  
[http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/report-13/h\\_pdf/s3-4.pdf](http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/report-13/h_pdf/s3-4.pdf)
15. 内閣府,「平成 24 年度男女共同参画社会に関する世論調査」家庭生活等に関する意識について  
<http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-danjo/zh/z14.html>
16. 総務省統計局,主な行動の種類別生活時間 (平成 18 年) 一週全体、末子が 3 歳未満の共働き世帯の夫・妻 (夫婦と子供の世帯) ー  
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/topics/topi30.htm>
17. 五十嵐, 久人/飯島. "父親の育児参加への意識と育児行動." 紀要 18, (2001): 89-93.
18. 中島, 久美子. "生後 6 ヶ月児をもつ母親が認めた夫の父親行動." 群馬保健学紀要 26, (2006): 19-26.
19. 舩橋恵子. "父親の現在." 変容する家族と子ども』 教育出版 (1999): 85-105.
20. 渡邊, タミ子/鈴木. "父親の育児協力・夫婦の対話と母親の育児満足度との関連性." 紀要 18, (2001): 47-53.
21. 厚生労働省,「平成 23 年度版 働く女性の実情」第 1 章 平成 23 年の働く女性の状況  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/11b.pdf>
22. 平山順子. 家族を「ケア」ということーケアの喜怒哀楽を左右するものー 柏木恵子, 高橋恵子編 心理学とジェンダー: 学習と研究のために 東京: 有斐閣, (2003)
23. ベネッセ次世代育成研究所(2007) 「第 1 回妊娠出産子育て基本調査」第 2 章 養育態度と子育て意識  
[http://berd.benesse.jp/jisedaikin/research/pdf/kihonC\\_049-065.pdf](http://berd.benesse.jp/jisedaikin/research/pdf/kihonC_049-065.pdf)
24. 大元, 千種. "父親の育児参加とその支援について." 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要 5, (2010): 187-196.
25. 本村, 汎. "育児不安の社会的考察: 援助システムの確立にむけて." 大阪市立大学生活科学部紀要 33, (1985): 231-243.
26. 浦山, 晶美. "母親の身近な人間関係におけるストレス感と不適切な養育行動の関連性について." 石川看護雑誌 6, (2009): 11-17.
27. 菅原, 守都. "母性看護における夫への教育指導--父親の役割について考える (第 20 回茨城県母性衛生学会総会ならびに学術集会)." 茨城県母性衛生学会誌 no. 20 (2000): 25-28.
28. 奥住, みつ子. "当院における父性意識の形成・発達過程に関する研究: 新生児の父親の調査." 母性衛生 = Maternal Health 42, no. 4 (2001): 686-692.
29. 小笠原, 百恵. "親になった男性の「親性」に関する文献研究." 関西看護医療大学紀要 2,

no. 1 (2010): 11-21.

30. 平成 23 年度東京都男女雇用平等参画状況調査結果報告書

# 付録

①：アンケート調査送付状

②：男性用アンケート用紙

③：女性用アンケート用紙

# 「夫婦の育児に対する意識調査」

## ご協力をお願い

慶應義塾大学ヘルス・コミュニケーション研究会の鷺見祐介と申します。現在子育て中のご夫婦を対象に、夫婦間の育児に対する意識や役割分担について研究しています。本アンケートでは、現在皆様がどのような意識を持って育児を行い、夫婦でどのような時間を過ごされてきたのか等、皆様のリアルな体験や想いについてお聞かせいただきたいと考えています。この調査が、今後多くの人が満足していく育児をするための一つの手助けとなればと思っております。

ご多忙のところ誠に恐縮ですが、何卒ご協力賜りますようお願い申し上げます。  
末筆ではございますが、時節柄、くれぐれもご自愛くださいますようお願い申し上げます。

平成 25 年 12 月

### ■ 調査の概要

調査対象：現在育児をなさっているご夫婦

方 法：アンケート調査

調査票への回答は、「男性用」「女性用」と分けて用意してあります。夫婦間の本音の意識を調査したいと考えておりますので、夫婦間で相談せず独自で記入していただきます。

所要時間：約 10 分

### ■ 個人情報の取り扱い

アンケート結果を公表する場合は、個人の特定ができないよう配慮し、内容及び個人の情報を厳重に管理致します。また、このアンケートの内容はこの調査の目的以外で使用されることはありません。その他個人情報に関して不安がある場合は、お気軽にご相談ください。

### ■ お問い合わせ先

調査におけるご質問・ご意見等がありましたら、以下の連絡先までお寄せください。

慶應義塾大学総合政策学部 4年

鷺見 祐介 -Yusuke Sumi-

PCメールアドレス s10446ys@sfc.keio.ac.jp

秋山美紀研究会HP：<http://akiyama-lab.sfc.keio.ac.jp/index.html>

## 男性の方がお答えください

今回は、お時間を頂きありがとうございます。誠に恐れ入りますが、以下のアンケートにご協力をお願い致します。

※ ここでの「育児」の中には、家事等の配偶者のサポートといった面と、おむつ替え等の子どもへの直接的な面、両方を含みます。

当てはまる項目に○を付けてください。

**Q1 あなたの年齢を教えてください。**

- ①20歳未満 ②20～24歳 ③25～29歳 ④30～34歳 ⑤35～39歳 ⑥40歳～

**Q2 あなたの雇用状況を教えてください。**

- ①自営業 ②正社員/正職員 ③嘱託社員/嘱託職員 ④派遣・請負 ⑤パート・アルバイト ⑥主夫  
⑦その他( )

**Q3 あなたの配偶者の雇用状況を教えてください。**

- ①自営業 ②正社員/正職員 ③嘱託社員/嘱託職員 ④派遣・請負 ⑤パート・アルバイト ⑥主婦  
⑦その他( )

**Q4 現在の子どもの人数は何人ですか？**

- ①1人 ②2人 ③3人 ④4人～

**Q5 子どもの年齢は何歳ですか？**

第一子 ( )歳 第二子 ( )歳 第三子 ( )歳 第四子 ( )歳

■育児の分担についてお聞きします。

**Q6 あなたは、育児は夫婦共同で担うべきだと思いますか？**

- ①強くそう思う ②ある程度そう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない

**Q7 あなたは、現状の育児の分担(家事サポート等を含む)に満足していますか？**

- ① とても満足 ② ほぼ満足 ③ やや不満 ④ かなり不満

**Q8 パートナーは現状の育児の分担に満足していると思いますか？**

- ①とても満足していると思う ②ほぼ満足していると思う ③やや不満があると思う ④かなり不満だと思う

**Q9 あなたは配偶者と育児等の役割分担の話し合いをしましたか？**

- ①はい ②いいえ

**Q10 育児の役割分担についての話し合いを定期的にしたと思いますか？**

- ①とてもそう思う ②そう思う ③あまりそう思わない ④全くそう思わない

**Q11 夫婦間の会話時間は1日平均どれくらいですか？**

- ①15分未満 ②15分～30分未満 ③30分～1時間未満 ④1時間以上

**Q12 Q11で答えた時間の内、子どもや育児に関する会話は1日平均どれくらいですか？**

- ①15分未満 ②15分～30分未満 ③30分～1時間未満 ④1時間以上

**Q13 子育て学級や、両親教室等に夫婦そろって参加したことはありますか？**

- ①ある ②ない

**Q14 自分に任せてほしい家事、育児はどれですか？上位3つに当てはまる選択肢の番号を記載してください。**

- ①ゴミ出し ②掃除(屋外) ③掃除(屋内) ④料理 ⑤皿洗い ⑥買い物 ⑦洗濯 ⑧子どもの遊び相手  
⑨おむつ替え ⑩子どもをお風呂に入れる ⑪食事補助(離乳食等) ⑫着替え ⑬寝かしつけ  
⑭しつけ・言い聞かせ ⑮知育教育 ⑯授乳(ミルク) ⑰保育園の送り迎え ⑱保育園などの行事  
⑲その他 ご自由に記載してください。( ) ⑳一つもない

1位

2位

3位



**Q15 Q14で、その項目を選んだ理由を自由にお書きください。**

--

**Q16 あなたは育児休業を取得したいと思いますか？**

①はい ②いいえ

**Q17 その他、育児について配偶者への要望等、記述したいことがありましたら自由にお書きください。**

--

以上です。

皆さまのアンケートのご回答は、今後の私の研究の参考にさせていただきます。

ご協力、誠にありがとうございました。

調査結果についてフィードバックを希望される方は、下記の「調査結果送付先」に連絡先をご記入下さい。ご記入いただいた連絡先に、調査結果のとりまとめを郵送させていただきます。

調査結果の送付先	
お名前	施設名、ご所属
住所	
電子メール アドレス	

卒業論文は2014年1月中旬に完成予定です。1月末までに郵送いたします。

どうぞよろしくお願い致します。

## 女性の方がお答えください

今回は、お時間を頂きありがとうございます。誠に恐れ入りますが、以下のアンケートにご協力をお願い致します。

※ ここでの「育児」の中には、家事等の配偶者のサポートといった面と、おむつ替え等の子どもへの直接的な面、両方を含みます。

当てはまる項目に○を付けてください。

**Q1 あなたの年齢を教えてください。**

- ①20歳未満 ②20～24歳 ③25～29歳 ④30～34歳 ⑤35～39歳 ⑥40歳～

**Q2 あなたの雇用状況を教えてください。**

- ①自営業 ②正社員/正職員 ③嘱託社員/嘱託職員 ④派遣・請負 ⑤パート・アルバイト ⑥主婦  
⑦その他( )

**Q3 あなたの配偶者の雇用状況を教えてください。**

- ①自営業 ②正社員/正職員 ③嘱託社員/嘱託職員 ④派遣・請負 ⑤パート・アルバイト ⑥主夫  
⑦その他( )

**Q4 現在の子どもの人数は何人ですか？**

- ①1人 ②2人 ③3人 ④4人～

**Q5 子どもの年齢は何歳ですか？**

第一子 ( )歳 第二子 ( )歳 第三子 ( )歳 第四子 ( )歳

■育児の分担についてお聞きします。

**Q6 あなたは、育児は夫婦共同で担うべきだと思いますか？**

- ①強くそう思う ②ある程度そう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない

**Q7 あなたは、現状の育児の分担(家事サポート等を含む)に満足していますか？**

- ① とても満足 ② ほぼ満足 ③ やや不満 ④ かなり不満

**Q8 パートナーが行う現状の育児の分担に満足していますか？**

- ① とても満足している ② ほぼ満足している ③ やや不満がある ④ かなり不満だ

**Q9 あなたは配偶者と育児等の役割分担の話し合いをしましたか？**

- ① はい ② いいえ

**Q10 今後、育児の役割分担についての話し合いを定期的に行いたいと思いますか？**

- ① とてもそう思う ② そう思う ③ あまりそう思わない ④ 全くそう思わない

**Q11 夫婦間の会話時間は1日平均どれくらいですか？**

- ① 15分未満 ② 15分～30分未満 ③ 30分～1時間未満 ④ 1時間以上

**Q12 Q11で答えた時間の内、子どもや育児に関する会話は1日平均どれくらいですか？**

- ① 15分未満 ② 15分～30分未満 ③ 30分～1時間未満 ④ 1時間以上

**Q13 子育て学級や、両親教室等に夫婦揃って参加したことはありますか？**

- ① ある ② ない

**Q14 配偶者がやってもらいたい家事、育児はどれですか？上位3つをお答えください**

- ① ゴミ出し ② 掃除(屋外) ③ 掃除(屋内) ④ 料理 ⑤ 皿洗い ⑥ 買いもの ⑦ 洗濯 ⑧ 子どもの遊び相手  
⑨ おむつ替え ⑩ 子どもをお風呂に入れる ⑪ 食事補助(離乳食等) ⑫ 着替え ⑬ 寝かしつけ  
⑭ しつけ・言い聞かせ ⑮ 知育教育 ⑯ 授乳(ミルク) ⑰ 保育園の送り迎え ⑱ 保育園などの行事  
⑲ その他 ご自由に記載してください。( ) ⑳ 一つもない

1位

2位

3位

**Q15** Q14で、その項目を選んだ理由、またその他思っている事を自由にお書きください。

--

**Q16** あなたは配偶者に育児休業を取得してほしいですか？

①はい ②いいえ

**Q17** その他、育児について配偶者への要望等、記述したいことがありましたら自由にお書きください。

--

以上です。

皆さまのアンケートのご回答は、今後の私の研究の参考にさせていただきます。

ご協力、誠にありがとうございました。

調査結果についてフィードバックを希望される方は、下記の「調査結果送付先」に連絡先をご記入下さい。ご記入いただいた連絡先に、調査結果のとりまとめを郵送させていただきます。

調査結果の送付先	
お名前	施設名、ご所属
住所	
電子メール アドレス	

卒業論文は 2014 年 1 月中旬に完成予定です。1 月末までに郵送いたします。

どうぞよろしくお願い致します。

夫婦間の意識の差からみた双方が満足する男性の育児参加

---

---

2014年2月20日 初版発行

著者 鷺見祐介

監修 秋山美紀

---

発行 慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤5322

TEL:0466-49-3437

---

Printed in Japan 印刷・製本 ワキプリントピア

---

**SFC-SWP 2013-004**

■本論文は研究会において優秀と認められ、出版されたものです。